

桜の園

——喜劇 四幕——

アントン・チエーホフ

神西清訳



人物

ラネーフスカヤ（リュボーフィ・アンドレーエヴナ）愛称リユー

バ 女地主

アーニヤ その娘、十七歳

ワリーヤ その養女、二十四歳

ガーエフ（レオニード・アンドレーエヴィチ）愛称リヨーニヤ

ラネーフスカヤの兄

ロパーヒン（エルモライ・アレクセーエヴィチ）商人

トロフィーモフ（ピョートル・セルゲーエヴィチ）愛称ペー

チャ 大学生

ピーシチク（ボリース・ポリーソヴィチ・シメオーノフ）

地主

シャルロット（イワーノヴナ） 家庭教師

エピホードフ（セミヨン・パンテレエヴィチ） 執事

ドウニヤーシャ 小間使

フィールス 老僕ろうぼく、八十七歳

ヤーシャ 若い従僕

浮浪人

駅長

郵便局の官吏

ほかに客たち、召使たち

ラネーフスカヤ夫人の領地でのこと

第一幕

いまだに子供部屋と呼ばれている部屋。ドアの一つはアーニヤの部屋へ通じる。夜明け、ほどなく日の昇る時刻。もう五月で、桜の花が咲いているが、庭は寒い。明けがたの冷気である。部屋の窓はみなしまっている。

ドウニヤーシヤが蠟燭ろうそくをもち、ロパーヒンが本を手に登場。

ロパーヒン やつと汽車が着いた、やれやれ。何時だね？
ドウニヤーシヤ まもなく二時。(蠟燭を吹き消す)もう明る

いですわ。

ロパーヒン いったいどのくらい遅れたんだね、汽車は？ まあ二時間はまちがいあるまい。(あくび、のび) おれもいとところがあるよ、とんだドジを踏んじまった！ 停車場まで出迎えるつもりで、わざわざここへ来ていながら、とたんに寝すごしちまうなんて……。椅子いすにかけたなりぐつすりさ。いまましい。……せめてお前さんでも起してくれりやいいのに。

ドウニヤーシャ お出かけになったとばかり思っていました。(耳をすます) おや、もういらしたらしい。

ロパーヒン (耳をすます) ちがう。……手荷物を受けとつたり、何やかやあるからな。……(間) ラネーフスカヤの奥さんは、外国で五年も暮してこられたんだから、さぞ変

られたことだらうなあ。……まったくいい方かただよ。きさくで、さばさばしててね。忘れもしないが、おれがまだ十五ぐらいのガキだった頃ころ、おれの死んだ親父おやじが——親父はその頃、この村に小さな店を出していたんだが——おれの面つらをげんこで殴りつけて、鼻血を出したことがある。……その時ちようど、どうしたわけだか二人でこの屋敷へやって来てね、おまけに親父は一杯きげんだったのさ。すると奥さんは、つい昨日のことのように覚えているが、まだ若くつて、こう細っそりした人だったがね、そのおれを手洗いのところへ連れて行ってくれた。それが、ちようどこの部屋——この子供部屋だったのさ。「泣くんじやないよ、ちっちゃなお百姓さん」と言っつてね、「婚礼までには直りますよ（訳注 怪我をした人に言う慰めの慣用句）。……」（間）

ちつちやなお百姓か。……いかにもおれの親父はどん百姓
だったか、おれはというと、この通り白いチョッキを着て、
茶色い短靴たんぐつなんかはいている。雑魚ざこのとまじりさ。……
そりや金はある、金ならどつさりあるが、胸に手をあてて
考えてみりや、やつぱりどん百姓にちがいはないさ。……
(本をばらばらめくって) さつきもこの本を読んでいたんだ
が、さつぱりわからん。読んでるうちに寝ちまった。(間)
ドウニヤーシャ 犬はみんな、夜つびて寝ませんでしたわ。
嗅かぎつけたんですわね、ご主人たちのお帰りを。

ロパーヒン おや、ドウニヤーシャ、どうしてそんなに……
ドウニヤーシャ 手がぶるぶるしますの。あたし気が遠くなっ
て、倒れそうだわ。

ロパーヒン どうもお前さんは柔弱でいかな、ドウニヤー

シヤ。みなりもお嬢さんみたいだし、髪かっこうの格好だつてそう
だ。駄目だめだよ、それじゃ。身のほどを知らなくちや。

エピホードフが花束をもつて登場。背広を着こみ、ひどくギユウギユウ鳴る、ピカピカに磨みがきあげた長靴をはいている。はいつてきながら花束を落す。

エピホードフ (花束をひろう) これを庭男がとどけてよこ
しました。食堂さかに挿すようにつてね。(ドウニヤーシヤに花
束をわたす)

ロパーヒン ついでにクワスをおれに持つてきとくれ。

ドウニヤーシヤ かしこまりました。(退場)

エピホードフ 今ちようど明け方の冷えて、零下三度の寒さ

ですが、桜の花は満開ですよ。どうも感服しませんなあ、わが国の気候は。(ため息) どうもねえ。わが国の気候は、汐しおどきにぴたりとは行きませんですな。ところでロパーヒンさん、事のついでに一言申し添えますが、じつは一昨日いつさくじつ、長靴を新調したところが、いや正真正銘のはなし、そいつがやけにギユウギユウ鳴りましてな、どうもこうもなりません。何を塗ったもんでしようかな？

ロパーヒン やめてくれ。もうたくさんだ。

エピソード 毎日なにかしら、わたしには不仕合せが起るんです。しかし愚痴は言いません。馴なれっこになって、むしろ微笑を浮べているくらいですよ。

ドウニヤーシヤ登場、ロパーヒンにクワスを差出す。

エ。ピホードフ どれ行くとするか。(椅子にぶつかって倒す)
また、これだ。……(得意げな調子で)ね、いかがです、口
幅つたいことを言うようですが、なんたる回り合めぐせでしよ
う、とにかくね。……こうなるともう、天晴あっぱれと言いたいく
らいですよ! (退場)

ドウニヤーシャ じつはね、ロパーヒンさん、あのエピホー
ドフがあたしに、結婚を申しこみましたの。

ロパーヒン ほほう!

ドウニヤーシャ どうしたらいいのか、困ってしまいます
わ。……おとなしい人だけれど、ただ時どき、何か話をし
だすと、てんでわけがわからない。聞いていれば面白おもしろいし、
情じょうもこもっているんだけど、ただどうも、わけがわから

なくってねえ。あたし、あの人がまんざら厭いやじゃありませんし、あの人ときたら、あたしに夢中なんですの。不仕合せな人で、毎日なにかしら起るんです。ここじゃあの人のこと、「二十二の不仕合せ」って、からかうんですよ。……ロパーヒン（きき耳を立てて）さあ、こんどこそお着きらしいぞ……

ドウニヤーシャ お着き！ どうしたんでしよう、あたし……からだじゆう、つめたくなつたわ。

ロパーヒン ほんとにお着きだ。出迎えに行こう。おれの顔がおわかりかなあ？ なにせ五年ぶりだから。

ドウニヤーシャ（わくわくして）あたし倒れそうだわ。……ああ、倒れそうだ！

二台の馬車が表口へ乗りつける音。ロパーヒンとドウニヤーシヤは急いで出て行く。舞台空虚。つづく部屋部屋で、ざわめきがはじまる。ラネーフスカヤ夫人を停車場まで迎えに行った老僕ろうぼくフィールスが、杖つえにすがりながら、あたふたと舞台をよこぎる。古めかしいお仕着せに、丈の高い帽子をかぶり、何やら独りごとを言っているが、一言も聞きとれない。舞台うらのざわめきは、ますます高まる。「さあ、こつちから行きましようよ……」という声。ラネーフスカヤ夫人、アーニヤ、鎖につないだ小犬を連れたシャルロツタ、以上みな旅行服で、——それから外套がいとうにプラトークすがたのワーリヤ、ガーエフ、ピーシク、ロパーヒン、包みとパラソルを持ったドウニヤーシヤ、いろんな荷物をかかえた召使たち——みなみな部

屋に通りかかる。

アーニヤ ここを通つて行きましようよ。ねえママ、この部屋なんだか覚えてらつしやる？

ラネーフスカヤ (嬉し^{うれ}そうに、なみだ声で) 子供部屋！

ワーリヤ なんて寒いんだろう、手がかじかんでしまったわ。(ラネーフスカヤに) あなたのお部屋は、白いほうもスミレ色のほうも、ちゃんと元のままですわ、お母さま。

ラネーフスカヤ 子供部屋、なつかしい、きれいなお部屋……。

わたし子供のころ、ここで寝たのよ。……(泣く)今でもわたし、まるで子供みたいだわ。……(兄とワーリヤに、それからまた兄にキスする) ワーリヤはちつとも変らないのね、相変らず尼さんみたいね。ドウニヤーシヤも、わかり

ましたよ。……（ドウニヤーシャにキスする）

ガーエフ 汽車は二時間もおくれた。え、どうだい？ なん
てぎまだらう？

シャルロッタ （ピーシチクに）わたしの犬は、クルミも食
べるのよ。

ピーシチク （呆れ顔あきで）へえ、こりや驚いた！

アーニヤとドウニヤーシャのほか、一同退場。

ドウニヤーシャ やつとお帰りになった、……（アーニヤの
外套と帽子をぬがせる）

アーニヤ わたし途中四晩も眠れなかったの……今じゃもう、
ごごえあがつちまったわ。

ドウニヤーシャ あなたがたがお発たちになつたのは、大齋たいさいのころ（訳注 復活祭に先だつ七週間の精進期間で、年によつて違ちがうが、およそ二月初めから三月初旬までの間になる）で、まだ雪がふつて、ひどい凍いてつきようでしたが、今はまあどうでしょう？ 可愛いお嬢さま！（笑つて、アーニヤにキスする）待ち遠しかつたですわ、大好きな、可愛かわいいお嬢さま。……早速ですけど、あたしお話がありますの。一分間だつて待てませんの……

アーニヤ （だるそうに）また、なんの話……

ドウニヤーシャ 執事のエピホードフが、復活祭のあとで、あたしに結婚を申込みましたのよ。

アーニヤ いつも、おんなし事ばかり……（髪を直しながら）わたし、ピンをみんな落してしまつたわ。……（疲れきつ

て、よろよろしている)

ドウニヤーシヤ どう考えたらいいか、困つてしまいますわ。あの人、あたしを愛してますの、とても愛してますの!

アーニヤ (自分の居間のドアをのぞきこみ、なつかしそうに) わたしの部屋、わたしの窓、まるで旅行なんかしなかつたみたい。わたし、うちにいるのね! あした朝おきたら、すぐ庭へ出てみよう。……ほんとに、ちよつとでも寝られたらよかつたのにねえ! 道中ずっと眠らずじまい、なんだからとても気にかかつて。

ドウニヤーシヤ 一昨日いっさくじつ、トロフィーモフさんがいらつしやいました。

アーニヤ (嬉しそうに) ペーチャが!

ドウニヤーシヤ お風呂場ふろばで寝てらつしやいますよ、あすこ

に陣どつてしまつてね。お邪魔になつちや悪いからな、ですつて。(懐中時計を出して見て)あのかた、お起しするといいんですけど、ワルワーラさま(訳注 ワーリヤの正式の名)がいけないと仰おつしやるものですから。お前、あの人を起すんじゃないよ、つて。

ワーリヤ登場、バンドに鍵束かぎたばをさげている。

ワーリヤ ドウニヤーシャ、コーヒーを早く……。お母さんがコーヒーをご所望だからね。

ドウニヤーシャ はい、ただ今。(退場)

ワーリヤ よかつたわ、みんな無事でお着きで。あんたも、やつとまたお家うちね。(優しくいたわりながら)わたしのいい

子が帰ってきた！　べっぴんさんが帰ってきた！

アーニヤ　ずいぶん辛つらかったわ、わたし。

ワーリヤ　察するわ！

アーニヤ　わたしがここを発つたのは、御受難週間（訳注

大齋期の第五週）で、まだ寒いころだったわ。シャルロツタつたら途中のべつしやべりどおしで、手品までして見せるの。なんだってあんた、シャルロツタなんか付けてくれたの……

ワーリヤ　だって、あんたひとりで旅へ出すわけにも行かないじゃないの、アーニヤ。十七やそこらで！

アーニヤ　パリに着いたら、あすこも寒くつて、雪だったわ。

わたしのフランス語ときたら、凄すごいものでしょう。ママは五階に部屋をとっていてね、わたしがあがって行くと、誰だれ

だかフランス人の男だの、女だの、ちっちゃな本をもった年寄りのカトリックの坊さんだのが、つめかけていて、部屋じゅうタバコの煙でいっぱい、そりや厭なの。わたし急にママが可哀かわいそうになつて、あんまり可哀そうだもんだから、ママの頭を抱いて、ぎゅつと両手でしめつけたなり、放せないの。ママはそれからいつも甘つたれて、泣いてばかりいたわ……

ワリーヤ (涙ごえで) もういいわ、もう言わないで……

アーニヤ マントン (訳注 南フランス、ニースに近い保養地) の近くのご自分の別荘も売ってしまったし、ママにはもう、なんにも残っていないの、なんにも。わたしだつて一コペイカもなくなつてしまつて、やつとこさで帰つてきたのよ。だのにママつたら、ちつともわからないの。駅の食

堂へはいると一ばん高い料理を注文するし、ボーイのチツプは一ループリずつなのよ。シャルロットも同じなの、おまけにヤーシヤまでが、ちゃんと一人前とるの、見ちやいられないわ。ヤーシヤつて、ほら、ママのボーイよ。それも一緒に連れてきたの……

ワリーヤ 見たわ、いやなやつ。

アーニヤ で、どうなの、その後？ 利子は払えた？

ワリーヤ それどころじゃないわ。

アーニヤ 困るわね、どうしましょう。……

ワリーヤ 八月には、この領地が競売になるわ……

アーニヤ ああ、どうしよう。

ロパーヒン (ドアから覗いて、牛のなき真似をする) モオ・

オ・オ…… (去る)

ワーリヤ (涙ごえで) ええ、こうしてやりたい…… (拳固^{げんこ}
でおどす)

アーニヤ (ワーリヤを抱いて、小声で) ワーリヤ、あの人
あんたに申込みをして? (ワーリヤ、否^{いや}というしるしに
首を振る) だってあの人、あなたを愛してるのよ。……お
たがい打明けたらどうなの、何を二人とも待つてるの?

ワーリヤ わたし思うのよ、これは結局どうにもならない
話だつて。あの方は仕事が多いから、わたしどころじゃな
い……見向きもしないのよ。いつそどこかへ行つてしまつ
てくれるといいんだけど。あの方の顔、見るのがつらいわ。
みんな、わたしたちの結婚のうわさをして、お祝いまで言つ
てくれるけれど、ほんとうは何もありやしない。夢みたい
なものなのよ。…… (調子をかえて) あんたのブローチ、

みっばち
蜜蜂に似ているわ。

アーニヤ (悲しそうに) これ、ママが買ってくれたの。(自分の部屋へはいつて、快活な子供っぽい調子で) あたしパ
リでね、軽気球に乗ったわ!

ワーリヤ わたしのいい子が帰ってきた! ベっぴんさんが
帰ってきた!

ドウニヤーシヤは、コーヒー沸かしをもつてすでに戻つ
てきており、コーヒーを煮ている。

ワーリヤ (ドアのそばに立つて) わたしね、アーニヤ、こう
して一日じゅう家のことうちであくせくしながらいつも空想し
ているの。あんたをお金持の人のところへお嫁にやれたら、

わたしも安心がいつて淋さびしい僧院にこもれるわ。それから
キーエフへ……モスクワへと、ずっと聖地めぐりをして暮
すの。……聖地から聖地へめぐつて行くの。きつと、すば
らしいわ！……

アーニヤ お庭で鳥がないている。今なん時？

ワリーヤ とつくに二時は回つたはずよ、もう寝たらいいわ、
アーニヤ。(アーニヤの部屋へはいりながら) きつとすばら
しいわ！

ヤーシヤが、膝掛ひざかけと旅行用の信玄袋を持って登場。

ヤーシヤ (舞台を横よこぎりながら、いんぎんに) こちらを通つ
ても宜よろしいでしょうか？

ドウニヤーシヤ まあ、見ちがえるようだわ、ヤーシヤ。あら、
 見た、外国ですつかり立派になつて。

ヤーシヤ ふむ。……どなたでしたつけ？

ドウニヤーシヤ あんたがここを発つた時は、あたしまだこ
 んなだつたわ……（床からの高さを手で示す）ドウニヤー
 シヤよ、フョードル・コゾエードフの娘よ。覚えていない
 のね！

ヤーシヤ ふむ。……可愛いキュウリさん！（あたりを見

回し、彼女を抱く。彼女はキヤツと叫んで受け皿ざらを落す。

ヤーシヤすばやく退場）

ワーリヤ （ドアの敷居で、不興げな声で）また何かしたの？

ドウニヤーシヤ （涙ごえで）お皿を割りました。……

ワーリヤ そりゃいい前兆ね。

アーニヤ (自分の部屋から出てきながら) ママに言つとかなくちやいけないわ、ペーチャが来ているつて……

ワーリヤ わたし、あの人を起きないように言いつけたの。

アーニヤ (考えこんで) 六年まえに、お父さまが亡なくなつ

て、それから一月するひとつきと弟のグリーンシャが、川で溺おぼれたん

だわ。可愛い七つの子だったのに。ママは、もう辛抱しんぼうがな

らなくなつて、出てらしたのだわ。……あとも振返らずに、

出てらしたんだわ。……(身ぶるいする) わたしママの気持

よくわかるの、それがママに通じたらばねえ! (間) あ

ペーチャ・トロフィーモフは、グリーンシャの家庭教師だつ

たんだから、またお思い出しになるかも知れないわね……

フィールルス登場。セビロに白チョコッキのいでたち。

フィールス （コーヒー沸かしのところへ行き、心配そうに）

奥さまは、こちらで召し上がるとおっしゃる。……（白手袋

を両手にはめる）よいかな、コッファイは？ （ドウニヤー

シヤに向つて、きびしく）これ！ クリームはどうした？

ドウニヤーシヤ あら、どうしましょう……（あたふたと退

場）

フィールス （コーヒー沸かしのまわりをそわそわしながら）

ええ、この出来そこねえめが……（ぼそぼそ独り言をいう）

パリからお帰りになった。……日だんな那さまもいつぞや、パリ

へおいでなすつたつけな……馬車でな……（声を立てて笑

う）

ワリーヤ フィールス、お前なに言ってるの？

フィールス はい、何と仰せで？ (嬉しそうに) 奥さまが

お帰りになりました！ お待ち申した甲斐あつて。これで
もう、死んでも思い残すことはありませんわい。…… (嬉
し泣きに泣く)

ラネーフスカヤ夫人、ガーエフ、ピーシチク登場。ピー
シチクは薄いラシャの袖なし胴着に、だぶだぶのズボン
をはいている。ガーエフははいつてきながら、両腕と胴
とで玉突きをしているような仕草をする。(訳注 原書に
は示していないが、ロパーヒンもこのとき登場するらし
い)

ラネーフスカヤ どうするんですたっけ？ ちよつとおさら

いして……。黄玉は隅へ！ 空クツシヨンで真ん中へ！

ガーエフ 薄く当てて隅へだ！ ねえお前、むかしはお前と
いつしよに、ほれこの子供部屋で寝たもんだが、今じゃわ
たしも五十一だ、なんだか妙な気もするがなあ……

ロパーヒン さよう、時のたつのは早いものです。

ガーエフ なんだって？

ロパーヒン いや、時のたつのは早い、と言ったので。

ガーエフ この部屋は、虫とり草のにおいがする。

アーニヤ わたし、行って寝るわ。おやすみなさい、ママ。

(母にキスする)

ラネーフスカヤ わたしの可愛い子。(娘の手にキスする)お
まえ、うちに帰って嬉しいだろうね？ わたしは、まだほ
んとのような気がしないの。

アーニヤ おやすみなさい、伯父さま。

ガーエフ (彼女の顔と両手にキスする) ゆっくりおやすみ。

なんてお前は、お母さん似なんだろう！ (妹に) ねえリユー

バ (訳注) ラネーフスカヤ夫人の名リユボーフィの愛称)

お前もこの年ごろには、この子そっくりだったよ。

アーニヤは片手をロパーヒンとピーシチクに与え、自分の部屋へ引きとつてドアをしめる。

ラネーフスカヤ あの子すっかりくたくたなのね。

ピーシチク 道中がさぞ長かったでしょうからな。

ワリーヤ (ロパーヒンとピーシチクに) どうなすつて、皆

さん？ やがて三時ですよ、そろそろ紳士の体面をお考え

になつたらどうでしょう。

ラネーフスカヤ (笑う) お前、相変らずなのね、ワーリヤ。
(彼女を引きよせてキスする) このコーヒーを飲んだら、それでお開きにしましょうね。(フィールス、夫人の足もとに足載せのクッションを置く) ありがとうよ、フィールス。
わたし、コーヒーが癖になつてね、昼も夜も飲むですよ。
ありがとう、爺じいや。(フィールスにキスする)

ワーリヤ ちよつと見てこよう、荷物がみんな来ているかどうか。……(退場)

ラネーフスカヤ ほんとに、ここに坐すわっているのはわたしかしら?
(笑う) わたし飛んで跳ねて、両手を振りまわしたい。(両手で顔をおおう) これが夢だつたらどうしよう! わたし神かけて、生れ故郷が好きですの、まるで母親に甘

えるような気持ですの。わたし汽車の窓から、とても見てはいられなくなつて、泣いてばかりいましたわ。(涙ごえで)それはそうと、コーヒーを頂かなくてはね。ありがとうよよ、フィールス、ありがとう、爺や。お前が達者でいてくれて、わたしほんとに嬉しいよ。

フィールス おとといでございます。

ガーエフ 耳が遠いんだよ。

ロパーヒン わたしはこれからすぐ、今朝の四時すぎに、ハリコフへ発たなければなりません。じつに残念です！ちよつとお目にかかつて、お話ししたいこともあつたのですが……。しかし、相変らずご立派ですなあ。

ピーシチク (息をはずませながら) むしろ器量があがられたくらいだ。……お召物もパリ好みでな……。わしらなど、

どだい目がくらんで、まともにや拝めんほどですわい……
ロパーヒン あなたのお兄上、このガーエフさんは、わたし
のことを下司げすだ、強欲だと言われますが、そんなこと、わたし
しは一向平気です。なんとでも仰しやるがいい。ただわたし
の望むところは、あなただけは元どおりわたしを信用し
てくださいって、そのえも言われぬ、しみじみしたお眼めを、従
前同様わたしに注いで頂きたいということ。いやはや、
思いだしてもゾツとする！ うちの親父おやじは、あなたのお祖父じい
さんやお父さんの農奴だった。ところがあなたには、ほか
ならぬあなたという人には、わたしはいつぞや一方ならぬ
お世話になったことがある、それでわたしは、一切をきれ
いに忘れて、あなたを肉親のようにお慕いしています……
いや、肉親以上입니다。

ラネーフスカヤ わたし、じつとしちやいられない、とても
 駄目だめ……（ぱつと立ちあがって、ひどく興奮のていで歩き
 まわる）嬉うれしくつて嬉しくつて、気がちがいそうだ。……
 わたしを笑ってちようだい、ばかなんですもの。……なつ
 かしい、わたしの本棚ほんだな……（戸棚にキスする）わたしの小つ
 ちやなテーブル……

ガーエフ お前の留守のまに、乳母ばあやが死んだよ。

ラネーフスカヤ （腰をおろし、コーヒーを飲む）ええ、天
 国にやすらわんことを。知らせをもらいました。

ガーエフ それに、アナスターシイも死んだ。やぶにらみの
 ペトルーシカは、うちから暇をとって、今じゃ町の署長のと
 ころにいる。（ポケットから氷砂糖の小箱を取りだし、しゃ
 ぶる）

ピーシチク わしの娘のダーシェンカが……よろしくと申し
ました……

ロパーヒン わたしはあなたに、何かとても愉快な、楽しい
話が見たいのですが……（時計を出して見る）そろそろ発
たなければならぬので、おしゃべりをしていゝひまがあり
ません……でまあ、ごくかいつまんで申しあげます。す
でにご承知のとおり、お宅の桜の園は借財のカタで売りに出
ております、八月の二十二日が競売の日になっています。
しかし、ご心配はいりません、奥さん、どうぞ、ご安心ね
がいたい、打つ手はあります。……そこでわたしの案をよ
く聴いていただきたいのですが！ あなたの領地は、町か
らわずか五里のところにあつて、しかもついそばを鉄道が
開通しました。でもし、この桜の園と川沿いの土地一帯を、

別荘向きの地所に分割して、それを別荘人種に貸すとしたら、あなたはいくら内輪に見積つても、年に二万五千の収入をおあげになれるわけです。

ガーエフ 失礼だが、つまらん話だな！

ラネーフスカヤ あなたのお話、どうもよくわからないわ、ロパーヒンさん。

ロパーヒン つまり別荘人種から、三千坪に対して最低年二十五ルーブリの割で、地代をとり立てられるわけです。もし今すぐに広告なされば、このわたしが保証しますが、秋になるまでには一っかけらの空地も残さず、みんな借り手がつきますよ。早い話が万歳です、お家ご安泰というわけです。何しろ場所がらは絶好だし、川は深いし。ただ、もちろん、そこらをちよつと掃除したり、片づけたりはしなけ

ればなりません……例えばまあ、古い建物はみんな取払つてしまふ。さしずめこの屋敷なんか、もうなんの役にも立ちませんからね。それに、古い桜の園なんかも伐り払つてしまふ……

ラネーフスカヤ 伐り払うですつて？ まああなた、なんにもご存じないのねえ。この県のうちで、何かしらちつとは増しな、それどころかすばらしいものがあるとするれば、それはうちの桜の園だけですよ。

ロパーヒン そのすばらしいというのも、結局はだだっぴろいだけの話です。桜んぼは二年に一度なるだけだし、それだつて、やり場がないじゃありませんか。誰ひとり買手が無いのでね。

ガーエフ 『百科事典』にだつて、この庭のことは出ている。

ロパーヒン (時計をのぞいて) これといった思案も浮ばず、なんの結論も出ないとなると、八月の二十二日には、桜の園はむろんのこと、領地すつかり、競売に出してしまうのですよ。思いつきりが肝腎かんじんです！ ほかに打つ手はありません、ほんとです。ないとなつたら、ないのですから。

フィールス 昔は、さよう四、五十年まえには、桜んぼを乾して、砂糖づけにしたり、酢につけたり、ジャムに煮たりしたものだつた。それから、よく……

ガーエフ 黙っている、フィールス。

フィールス それからよく、乾した桜んぼを、荷馬車に何台も積んで、モスクワやハリコフへ出したもんでござんしたよ。大したお金でしたわい！ 乾した桜んぼだつて、あの頃はころ柔らかくてな、しるけ汗気があつて、甘味があつて、よい香りで

したよ。……あの頃は、こさえ方を知っていたのでな……

ラネーフスカヤ そのこさえ方が、今どうなったの？

フィールス 忘れちまいましたので。誰も覚えちやおりませ

ん。

ピーシチク (ラネーフスカヤ夫人に) パリはいかがでした？

ええ？ かえる 蛙をあがりましたか？

ラネーフスカヤ ワニを食べましたよ。

ピーシチク こりや、どうだ……

ロパーヒン 今まで田舎といえば、地主と百姓しかいません

でしたが、今日では別荘人種こんにちというものが現われています。

どんな町でも、どんな小つぽけな町でも、ぐるり一めん別

荘が建っています。このぶんでいくと、二十年もしたら、

別荘人種はどれくらい数になるでしょう。今でこそあの連中

は、バルコンでお茶を飲むのがせいぜいですが、あに凶ら
んややがては、あの連中もめいめい三千坪の地面で、農作
をはじめめるかも知れない。そのあかつきには、お宅の桜の
園も、豪勢な、ゆたかな、地上の天国になるでしょう。

ガーエフ (憤慨して) じつにくだらん!

ワーリヤ、ヤーシャ登場。

ワーリヤ お母さま、電報が二通きていましたわ。(鍵束かぎたばをよ
り分けて、音たかく古風な本棚をあける) ほら、これ。

ラネーフスカヤ パリからね。(ろくに読まずに、二通とも引
裂く) パリとは、もう縁きりだわ……

ガーエフ ねえリユーバ、知ってるかい、この本棚の歳としをさき?

ついこないだ、一ばん下の引出しを抜いて見たらばね、焼印で年号が押してあるんだ。ちょうど百年まえにできたんだよ。どうだい、ええ？ さしずめ記念祭でもよおしたところだよ。いくら命のないものにしろ、とにかくなんと言ったって、本棚にはちがないんだからね。

ピーシチク (びっくりして) 百年……。こりゃ、どうだ！

……

ガーエフ そう。大したもんさ。…… (戸棚にさわってみて) 親愛にして尊敬すべき戸棚よ！ 今や百年以上にわたって、絶えず善と正義の輝かしい理想をめざして進んできた、君の存在に挨拶あいさつを送る。みのり多き仕事へと招く君の無言の呼び声は、百年のあいだたゆむことなく、よく (涙ごえで) わが一家代々の人びとに、未来への勇気と信念を保持せし

め、われわれのうちに、善と社会的自覚の理想を涵養^{かんよう}してくれた。(間)

ロパーヒン なるほど……

ラネーフスカヤ あなた相変らずねえ、兄さん。

ガーエフ (いささか照れて) 右へ押して隅へ！ 薄く当てて真ん中へスポリ！

ロパーヒン (時計を出して見て) どれ、行かなくては。

ヤーシヤ (ラネーフスカヤ夫人に薬をさし出す) いかがでございます、丸薬をただ今召し上がっては……

ピーシチク 薬剤なんぞ、のむことはありませんよ、奥さん……毒にも薬にもなりやしませんや。……まあひとつ……こつちへおよこしなさい。(丸薬を受けとり、手の平へあけて、ふつと吹いて口へほうりこみ、クワスでのみくだす) この

通り！

ラネーフスカヤ （あきれて）まああなた、気でもちがったの？

ピーシチク 丸薬をすつかり頂きました。

ロパーヒン なんて大食おおぐらいだ！（一同わらう）

フィールス このかたは、復活祭の時おいでになって、キュウリを半たる召し上がりましたよ……（ぶつぶつつとつ呟く）

ラネーフスカヤ 何を言ってるのかしら？

ワリーヤ もう三年ごし、あんなふうにぶつぶつ言ってますの。わたしたち、馴なれてしまいました。

ヤーシヤ ご老体ですからな。

シャルロツタが白い服をきて、舞台をよこぎる。すこぶ

る瘦^やせた体を、ぎゅつと緊^しめあげるような着こなして、
バンドに柄^えつき眼鏡をさげている。

ロパーヒン どうも失礼、シャルロッタさん、まだご挨拶を
しませんでしたね。(彼女の手にキスしようとする)

シャルロッタ (手を引つこめながら) あなたに手をキスさ
せたら、次には肘^{ひじ}とおいでなさるでしょうよ、それから肩
とね……

ロパーヒン どうも運が悪い、今日は。(一同わらう) シャル
ロッタさん、手品を見せてくださいよ!

ラネーフスカヤ ほんとにシャルロッタ、手品を見せてちよ
うだい!

シャルロッタ だめです。わたし眠いんですから。(退場)

ロパーヒン 三週間したらお目にかかります。(ラネーフスカヤ夫人の手にキスする) ではそれまで、ご機嫌きげんよう。もう時間です。(ガーエフに) ではまた。(ピーシチクとキスをかわして) さようなら。(まずワーリヤと、ついでフィールス、ヤーシヤと握手して) 発ちたくないなあ。(ラネーフスカヤ夫人に) 別荘の件をつくりお考えになつて、決心がおつきでしたら、ちよつとお知らせを願います。五万ルーブリは作つて差しあげます。慎重にお考えください。

ワーリヤ (腹だたしく) さ、いい加減でいらつしやいよ!

ロパーヒン 行きます、行きますよ…… (退場)

ガーエフ 下司め。いやこれは、ごめんバルドン。……ワーリヤはあの男のところへ嫁いくんだけな、あれはワーリヤのムコさんだ。

ワーリヤ おじさん、余計なこと言わないで。

ラネーフスカヤ なによ、ワーリヤ、わたしそうなたら本
当に嬉しい。あれは、いい人だもの。

ピーシチク 人物は、じつになんともはや……よくできた人
で……。うちのダーシエンカも……やつぱりその、言つて
おりますよ……何やかやとな。（いびきをかいて、すぐまた
目をさます）いや、それにしても奥さん……恐縮ですが貸
してくださらんか……二百四十ルーブリだけ……あす担保
の利子を払わにやならんので……

ワーリヤ （仰天して）だめよ、だめですよ！

ラネーフスカヤ わたし、ほんとに一文もないのよ。

ピーシチク なあに出てきますよ。（笑う）決して希望は捨て
ません。いつぞやも、いよいよ駄目だ、これで破滅だと

観念したら、いや驚くまいことか、——鉄道がうちの地面を通つてね……金がころげこみましたよ。まあ見ててご覧なさい、また何かありますよ、今日でないまでも明日あすはね。ダーシエンカが二十万あてますよ……あれは富クジを一枚もつてますでな。

ラネーフスカヤ コーヒーも飲んだから、これでもう休めるわ。

フィールス (ブラシでガーエフの服を払いながら、訓戒口調で) またズボンをお間違えになった。ほんとに困つたお人だ!

ワーリヤ (小声で) アーニヤは寝ているわ。(そつと窓をあける) もう日が出た、寒くないわ。ご覧なさい、お母さん、なんて見事な桜の木でしょう! すばらしいわ、この

空気！ ムク鳥が啼ないている！

ガーエフ （べつの窓をあける）庭いちめん真つ白だ。おまえ忘れやしないだろう、え、リユーバ？ この長い並木は、ずっとまつすぐ、まるで革帯をぴんと張ったように伸びて、月夜には白々と光るのだ。ね、覚えてるだろう？ 忘れはしまいいね？

ラネーフスカヤ （窓から庭を眺ながめて）ああ、わたしの子供のころ、清らかな時代！ わたし、この子供部屋に寝て、ここから庭を眺めたものよ。あの頃は幸福が、毎朝わたしと一しよに目をさましたつけ。庭もこの通りだった、そっくりそのまま。（嬉しさのあまり笑う）真つ白、一めんに真つ白ね！ ああ、わたしの庭！ 暗い、うつとうしい秋や、寒い冬を越して、またお前は若々しく、幸福で一ぱいだわ。天

使たちが、お前を見すてなかつたのね。……ああ、わたしの胸や肩から、この重石おもしがとりのけられたら！ わたしの過去を、きれいに忘れることができたなら！

ガーエフ そう、だがこの庭も、借金のカタに売られてしま
う。妙な話だが、仕方がない……

ラネーフスカヤ あら、ご覧なさい、亡なくなつたお母さまが、
庭を歩いてらつしやるわ……白い服を召して！ （嬉しき
のあまり笑う）たしかにそうだわ。

ガーエフ どれ、どこに？

ワリーヤ しつかりなすつて、お母さん。

ラネーフスカヤ 誰もいない、気のせいだったわ。右手の、
あずまやへ行く曲り角に、白い若木の垂れているのが、女
の影に似てたんだわ……

トロフィーモフ登場。着ふるした学生服をきて、眼鏡をかけている。

ラネーフスカヤ　ほんとにすばらしい庭！　花が真っ白にか
さなつて、あの青い空……

トロフィーモフ　奥さん！　（夫人は彼をふりかえる）僕は
ちよつとご挨拶だけして、すぐ引きさがります。（熱烈に手
にキスする）朝まで待つように言われたんですが、とても
我慢がならないもんで……

ラネーフスカヤ夫人、けげんそうに彼を見る。

ワーリヤ (涙ごえで) ペーチヤ・トロフィーモフよ……
トロフィーモフ ペーチヤ・トロフィーモフ、お宅のグリー
シヤの家庭教師でした。……僕そんなに変ったでしょうか？

夫人は彼を抱いて、静かに泣く。

ガーエフ (当惑して) もういい、もういいよ、リユーバ。

ワーリヤ (泣く) だから言ったじゃないの、ペーチヤ、あ
したまでお待ちなさいって。

ラネーフスカヤ わたしのグリーシヤ……ああ坊や……グリー
シヤ……可愛い子……

ワーリヤ 仕方がないわ、お母さん。神さまの思召しおぼしめです
の。

トロフィーモフ (やさしく、涙ごえで) いいですよ、もういいですよ……

ラネーフスカヤ (静かに泣く) あの子は死んだ、溺れてしまった。……なぜなの？ なぜでしょう、あなた？ (声をひそめて) あすこでアーニヤが寝ているのに、わたし大きな声して……うるさいわね。……まあ、どうなすつたの、ペーチャ？ どうしてそんなに風采ふうさいが落ちたの？ なんだつてそう老ふけなすつたの？

トロフィーモフ 汽車のなかでも、どつかの百姓ばあ婆さんに、
“ねえ、禿はげの旦那だんな” って言われました。

ラネーフスカヤ あなたはあのころ、まるで子供で、可愛い学生だったわ。それが今じゃ、髪の毛も濃くはないし、眼鏡まで。ほんとに、今でも大学生なの？ (ドアのほうへ

行く)

トロフィーモフ きつと僕は、万年大学生でしょうよ。

ラネーフスカヤ (兄に、それからワリーヤにキスする) さ

あ、行っておやすみなさい。……あなたも老けたわねえ、
レオニード。

ピーシチク (夫人のあとにつづく) では、これでおねんね
か。……ええ、この足痛風めが。今日は泊めていただきま
すよ。……とにかくわしは、ねえ奥さん、あすの朝にや……
二百四十ルーブリというものが……

ガーエフ あいつ、自分のことばかりだ。

ピーシチク 二百四十ルーブリ……担保の利子を払うんでね。
ラネーフスカヤ お金なんかありませんよ、わたし……

ピーシチク 返しますからさ、奥さん。……わずかな金高じや

ありませんか……

ラネーフスカヤ　じゃいいわ、レオニードにたのみましよう。……出してあげて、レオニード。

ガーエフ　よし、出してやろう。ポケットをあけて待つてるがいい。

ラネーフスカヤ　仕方がないじゃないの、出したげなさいよ。……この人いるんだから……。返すと言うんだし。

ラネーフスカヤ夫人、トロフィーモフ、ピーシチク、フィールス退場。ガーエフ、ワーリヤ、ヤーシャ残る。

ガーエフ　妹は、まだ金をばらまく癖が直らんな。（ヤーシャに）いい子だから、もう少しあっちい行ってくれ。お前は二

ワトリ臭くてかなわん。

ヤーシヤ (冷笑をうかべて) そういう旦那は、相変らずで
らっしやるね。

ガーエフ なに? (ワーリヤに) こいつ、なんと言ったの
かね。

ワーリヤ (ヤーシヤに) お前のおつ母さんが村から出て来
て、きのうから下の部屋しもで待ってるよ、ちよつと会いたい
て……

ヤーシヤ ちえつ、うるさいつたらありやしねえ!

ワーリヤ まあ、いけずうずうしい!

ヤーシヤ 余計なこつた。あすでも来りやいいのにさ。(退
場)

ワーリヤ お母さんは相変らずで、ちつともお変りにならな

い。勝手にさせておいたら、何もかも人にやってしまいうわ。
ガーエフ そうさ…… (間) 何かの病気にたいして、あれも
これもと、いろんな薬をすすめるような時は、つまりその
病気が不治だというわけだ。わたしも、脳みそをしぼって
考えてるんだが、するといろんな手が浮ぶね。あんまり沢
山あるもんで、つまり本当のところは、一つもないという
ことになる。誰かの遺産がころげこめばよし、アーニヤを
大金持のところへ嫁にやるのもよし、それともヤロスラー
ヴリへ出かけて行って、伯爵夫人の伯爵さんにぶつかつて
みるのも悪くはあるまい。伯母さんは、とてもどえらい金
持だからな。

ワリーヤ (泣く) どうぞそうなればねえ。

ガーエフ 泣かないでもいい。伯母さんはとても金持なんだ

が、われわれきょうだい兄妹がお好きじゃない。だいいち妹が、貴族でもない弁護士風情ふぜいにとついだものでな……

アーニヤがドアのところに現われる。

ガーエフ 貴族でもない男と結婚した上に、行状も大いに宜よろしかつたとは言えないからな。あれは立派な女だ。氣立てもいいし、親切だ。わたしは大好きなんだが、それにしたつて、いくらヒイキ目に見たところで、やはり不身持ちなことだけは認めないわけには行かん。こいつは、ちよつとした身ぶり一つにも出ているよ。

ワリーヤ (ひそひそ声で) アーニヤがドアのところにいますよ。

ガーエフ　なんだって？　（間）おや、おかしい、何か右の眼めにはいった……よく見えないぞ。それで木曜にね、地方裁判所へ行つたら……

アーニヤはいつてくる。

ワリーヤ　どうして寝ないの、アーニヤ？

アーニヤ　寝られないの。だめなの。

ガーエフ　可愛い子。（アーニヤの顔や手にキスする）わたしの子……（涙ごえで）お前は姪めいどころじゃない、わたしのエンジェルだ、わたしの一切だ。信じておくれ、わたしを、ほんとだよ……

アーニヤ　信じてますわ、伯父さん。みんなあなたが好きで、

尊敬しています……でもねえ、伯父さん、あなたは黙ってらっしゃらなけりやいけないわ、ただじつと黙ってね。今しがたも、わたしのママのことを、なんて言ってらしたの？
ご自分の妹じゃありませんか？　なんだから、あんなことを仰おつしやるの？

ガーエフ　なるほど、なるほど……（彼女の片手で自分の顔をおおう）まったく、厭いやになるよ！　いやどうも、情けないこった！　おまけに先刻さつきは、本棚ほんだなの前で演説をした……ばかばかしい！　済んでからやつと、ばかげていることがわかつたんだ。

ワーリヤ　ほんとよ、伯父さん、黙ってらっしゃるに限るわ。黙っていれば、それでいいのよ。

アーニヤ　黙ってらっしゃれば、ご自分だつて気が休まるわ。

ガーエフ 黙るよ。(アーニヤとワーリヤの手にキスする) 黙るよ。ただ、ちよつと大事な話があるんだ、木曜に地方裁判所へ行つたら、偶然、仲間が寄り合つちまつてね、あれやこれやと四方山よもやまばなしが出たなかで、どうやらその、手形で金を借りて、銀行の利子が払えそうなんだ。

ワーリヤ どうぞそうなればねえ!

ガーエフ 火曜日に出かけていって、もう一度話してみよう。
(ワーリヤに) 泣かないでもいい。(アーニヤに) ママさんはロパーヒンに相談するだろうさ。あの男は、もちろん、いやとは言うまい。……それからお前は、ひと休みしたら、ヤロスラーヴリの伯爵夫人のところへ行つてみるんだな、お前のお伯母さんだからね。といった工合に、三方から運動すれば——もうこつちのものだ。利子は払えるさ、断じ

てね。……（氷砂糖を口へ入れる）わたしの面目なりなんなり、なんでもかけて誓うが、この領地は売られるものかね！（興奮して）ぼくの幸福にかけて誓う！ さあ、この手が証人だ（片手を相手に差出す）——もしこの僕が、ずるずる競売へまで持ちこませたら、その時こそ僕を、やぐざとでも恥しらずとでも言うがいい！ ぼくの全存在にかけて誓うよ！

アーニヤ（氣持の落ちつきが戻もどってきて、彼女は幸福だ）
あなたは、なんていい人でしよう、伯父さま、なんて利口な！（伯父を抱く）やつと安心したわ！ わたし安心して、とても幸福！

フィールルス登場。

フィールス (咎めるように) 旦那さま、ばちが当たりますぞ！
いつおやすみになりますので？

ガーエフ ああ今、すぐだよ。お前はさがっていい、フィールス。なあに、こうなりやもう、わたしは一人で着かえるよ。じゃ子供たち、お寝んねだよ。……詳しい話は明日のこととして、もう行って寝なさい。(アーニヤとワーリヤにキスする) わたしは八〇年代(訳注 一八八〇年代。ナロードニキー運動の退潮期)の人間だ。……なるほど評判のわるい時代じゃあるが、それにしたって、こうは言えるな——信念のため僕だって、少なからぬ苦痛をなめてきたもんだとね。百姓が僕を好いてくれるのも、まんざら不思議はない。農民を知らなくてはいかん！ そもそも彼らが、

いかなる……

アーニヤ また、伯父さま！

ワリーヤ 伯父さん、黙つてらつしやい。

フィールス (腹だたしげに) 旦那さま！

ガーエフ 行くよ、行くよ。……二人とも寝なさいよ。トウー。

クツションで真ん中へ！ みごとなやつをな…… (退場。)

フィールスちよこちよこと後にしたかう)

アーニヤ これで安心だわ。ヤロスラーヴリへなんか、わた

し行きたくない。あのおばあさま、嫌きらいなんだもの。でも、

とにかくホツとしたわ。ありがとう、伯父さま。(腰かけ

る)

ワリーヤ もう寝なくつちや。どれ行きましたよう。そうそう、

あんたの留守のまに、厭なことがあつたの。あの古いほう

の下部屋しもには、あんたも知つてのとおり、古手の召使ばかり
いるでしょう、——エファイミユシカだの、ポーリヤだの、
エフスチーグネイだの、カールプだのつて。あの連中、ど
こかの浮浪人どもを引っぱりこんで泊めだしたのよ。わた
し黙つていてやつた。そこへ耳にはいつたんだけど、わた
しがあの連中にエンドウ豆ばかり食べさせるような、そん
な噂うわさを飛ばしてるの。しわん坊だから、ですつてさ。……
それがみんな、エフスチーグネイの仕業なの。……「よし、
そんならこつちも覚悟がある」と、わたしは思つてね、エ
フスチーグネイを呼びつけた……（あくびをする）すると
やつて来たから……「なんてお前は、ええエフスチーグネ
イ……馬鹿ばかなんだい」つて言つてね……（アーニヤを見て）
アーニチカ！……（間）寝ちまつた。……（アーニヤの腕

をかかえて) さ、ベッドへ行きましょう。……さ、行くのよ! …… (連れて行く) わたしのいい子がおねんねだ! さ、行きましょう…… (ふたり行く)

はるか庭の彼方かなたで、牧夫が芦笛あしぶえを吹く。トロフィーモフが舞台を通りかかり、ワーリヤとアーニヤを見て、立ちどまる。

ワーリヤ しッ……このひと寝てるのよ。……寝てるのよ。さあ行きましょうね、可愛い子。

アーニヤ (小声で、夢見ごこちで) とてもくたびれたわ、わたし……まだ馬車の鈴の音がしてるわ。……伯父さま……いい人ね、ママも、伯父さまも……

ワーリヤ 行きましよう、アーニチカ、行きましようね……

(アーニヤの部屋へはいる)

トロフィーモフ (感きわまつて) おお、ぼくの太陽！ ぼ

くの青春！

——幕——

第二幕

野外。とうに見すてられ、傾きかかった古い小さな礼拝堂がある。そのそばに井戸。もとは墓標であつたとおぼしい大きな石が幾つか。古びたベンチが一つ。ガーエフの田舎屋敷へ通じる道が見える。片側に、高くそびえたポプラが黒ずんでいる。そこから桜の園がはじまるのだ。遠景に電信柱の列。さらに遙はるか遠く地平線上に、大きな都会のすがたがぼんやり見える。それは、よつぽど晴れわたつた上天気でないと思えないのだ。まもなく日の沈む時刻。

シャルロット、ヤーシャ、ドウニヤーシャが、ベンチにかけている。エピソードはそばに立って、ギターを弾いている。みんな思い沈んで坐すわっている。シャルロットは古いヒサシ帽をかぶり、肩から銃をおろして、革ひもの留金をなおしにかかる。

シャルロット　（思案のていで）わたし、正式のパスポートがないもので、自分が幾つなのか知らないの。それでいつも若いような気がしているわ。まだ小娘だったころ、お父つあんとお母さんは市いちから市いちへ渡り歩いては、見世物を出していたの、なかなか立派なものだった。わたしはサルとんぼト・モルがえりターレをやったり、いろんな芸当をやったものよ。お父つあんもお母さんも死んでしまうと、あるドイ

ツ人の奥さんがわたしを引取って、勉強させてくれた。そう。やがて大きくなって、家庭教師になった。だが一たい自分が、どこの何者なのか——さっぱり知らないの。……両親がどういう人だったか、正式の夫婦だったかどうか……それも知らない。(ポケットからキュウリを出してかじる) なんにも知らないわ。(間) いろいろ話もしたいけれど、話相手もなし……。わたしには誰だれもいないんだもの。

エピホードフ (ギターを弾きながら歌う)

浮世を捨てしこの身には

友もかたきも何かせん……

マンドリンを弾くのは、いいもんだなあ!

ドウニヤーシャ それはギターよ、マンドリンじゃないわ。

(ふところ鏡を見ながら白粉おしろいをはたく)

エピホードフ 恋に狂った男にとつちや、これもマンドリン
さね。……（口ずさむ）

たがいの恋の炎もて

胸もえ立ちてあるならば……

ヤーシャ、声をあわせる。

シャルロット すごい歌い方なこと、この人たち……ふッ！
山犬みたいだ。

ドウニヤーシャ （ヤーシャに）それにしても、外国へ行く
なんて、ほんとにいいわねえ。

ヤーシャ そりゃ、もちろんさ。あえて異論は唱えませんね
え。（あくびをして、葉巻を吸いはじめる）

エ。ピホードフ わかりきつた事さ。外国じや総すべてが、とうの昔に完全なコンプリート（訳注 原語は Complexion に当る外来語で「体格」の意味。それを「完成」の意味に使っているおかし味。以下エ。ピホードフの半可通ぶりは続出する）に達してますからね。

ヤーシヤ もちろんね。

エ。ピホードフ 僕ぼくは進歩した人間で、いろんな立派な本を読んでいるが、それでいてどうしても会得えとくできないのは、結局ぼくが何を欲ほっするか、つまりその傾向なんですよ——生くべきか、それとも自殺すべきか、つまり結局それなんだが、にもかかわらず僕は、ピストルは常に携帯していますよ。そらね……（ピストルを出して見せる）

シヤルロツタ やつと済んだ。どれ行こうかな。（銃を肩にか

ける)ねえエピホードフ、あんたは大そう頭のいい、大そうおつかない人だことねえ。さだめし女の子が、夢中になつて惚れこむだらうさ。ブルルル! (行きかける)才子とか才物とかいった手合いは、みんなこうしたお馬鹿さんばかりさ。話相手なんか誰もいやしない。……しよつちゆう独り、独りぼっち、わたしにや誰もいないのさ……そういう私が何者か、なんで生れてきたのか、それもわかったものじゃない……(ゆつくり退場)

エピホードフ つまり結局ですな、ほかの問題はさておいて、自分一個のことに関するかぎり、ともあれ僕はつぎのごとく言わざるを得んですよ——運命が僕を遇することの無慈悲残忍なる、あらしが小舟をもてあそぶに異ならん、とね。かりに一步をゆずつて、この僕の考えが間違っている

とすれば、では一体なぜ、今朝ぼくが目をさましてみると、まあ一例として言えばですな、おつそろしく大きな蜘蛛くもが、僕の胸のうえに乗つかつていたんでしよう。……こんなやつがね（両手で示す）。同様にして、クワスでノドをうるおそうと思つて手にとると、またしても、いやはや、たとえば油虫といったたぐいの、極度に無礼千万なやつがはいっている。（間）あんたはバックル（訳注 十九世紀イギリスの文明史家）を読んだことがありますか？（間）じつはね、ドウニヤーシャさん、ほんの二言三言、御意を得たいことがあるんですがね。

ドウニヤーシャ どうぞ。

エピホードフ それが実は、さし向いでお願いしたいんですが……（ため息をつく）

ドウニヤーシャ (当惑して) そう、いいわ……でもその前に、
わたしの長外套がいとろを持ってきてくださらない。……洋服ようふくだんす筆筒
のそばにあるわ。……すこし、じめじめしてきた……

エピホードフ いや、かしこまりました……持って参りましょ
う。……さあこれで、このピストルをどうしたらいいか、
やつとわかったぞ。……(ギターを取りあげ、軽く弾きな
がら退場)

ヤーシャ 二十二の不仕合せか! ばかなやつだよ、ここだ
けの話だが。(あくび)

ドウニヤーシャ ピストル自殺なんかされたら困るわねえ。
(間) あたし、このごろ落ちつきがなくなつて、しよつちゆ
う胸さわぎがするの。ほんの小娘のころから、お屋敷へあ
がつたもんだから、今じゃしもじもの暮しを忘れてしまつ

て、手だつてほらこんなに白くて、まるでお嬢さんみたい。気持まで華奢きゃしゃになつて、そりゃデリケートで、上品で、なんにでもびくびくするの。……とつても怖いのよ。だからヤーシヤ、もしもあんたに裏切られでもしたら、あたし神經がどうかなくなつてしまうことよ。

ヤーシヤ (キスしてやつて) 可愛いかわいキュウリさん! もちろん娘というものは、自分を忘れたらおしまいだ。だから僕が何より嫌きらいなのは、身もちのわるい娘さんさ。

ドウニヤーシヤ あたし、あんたが大好き。教養があつて、どんな理屈だつてわかるんだもの。(間)

ヤーシヤ (あくびをして) そうさな。……僕に言わせりや、こうさ——娘さんが誰かを好きになつたら、つまりふしだらなんだな。(間) きれいな空気のなかで、葉巻をふかすのは

いい気持だなあ。……（きき耳を立てて）誰か来るぞ。……
ありや奥さんがただ……

ドウニヤーシヤは、いきなり彼を抱擁する。

ヤーシヤ　うちへ帰りなさい、川へ水浴びに行つたような顔
をして、こつちの小径こみちから行きたまえ。うっかり出くわそ
うもんなら、僕がさも君と逢引あひびきしてたように思われるから
な。そいつはたまらんからなあ。

ドウニヤーシヤ　（そつと咳せきをする）葉巻のけむで、あたし
頭痛がしてきたわ。……（退場）

ヤーシヤは居残つて、礼拝堂のそばに坐る。ラネーフス

カヤ夫人、ガーエフ、ロパーヒン登場。

ロパーヒン 最後の肚はらをきめて頂きたいですな、——時は待ちやくれません。問題はなんにもありやしない。この土地を別荘地として出すのに、ご賛成かどうか？ 否いやか応か、一こと返事してくださいればいいんです。たつた一言！

ラネーフスカヤ 誰だろう、ここで嫌いやらしい葉巻をふかすのは！
(腰をおろす)

ガーエフ 鉄道が敷けてから、便利になったものさ。(腰をおろす) こうして町へ出かけて、ひる飯をやってこられるんだからな……黄玉は真ん中へ！ 何はともあれ家うちへ行つて、一勝負やりたいもんだが……

ラネーフスカヤ まだ大丈夫ですよ。

ロパーヒン　ね、ほんの一言！　（哀願するように）ねえ、ど

うかお返事を！

ガーエフ　（あくびまじりに）なんだね、そりや？

ラネーフスカヤ　（巾着をのぞいて）きんちやく昨日はお金ずいぶん沢山

あつたのに、今日はからつきしないわ。ワーリヤはかわい可哀そ

うに、なんとか切りつめようとして、わたしたちにはミル

クのスープを出し、勝手もとじゃ年寄り連中にエンドウ豆

ばかり食べさせてるというのに、わたしは何やら訳もわか

らない無駄むだづかいをしている。……（巾着をとり落す。金

貨がばらばらこぼれる）あら、こぼれちまった……（無念

の思い入れ）

ヤーシヤ　ご免ください、ただ今ひろって差上げます。（金貨

をひろう）

ラネーフスカヤ　ご苦勞さん、ヤーシャ。それにわたし、なん
だつてお午ひるなんか食べに行つたんだらう。……あなたご推
奨のあのちやちなレストラン。音楽つきだかなんだか知らな
いけれど、テーブル・クロスがシャボンくさかつたわ。……
おまけに、なぜあんなに沢山のむことがあるの、ええリョー
ニヤ？　なぜ、あんなにどつきり食べたり、しゃべり散ら
したりすることがあるの？　今日もあのレストランで、あ
んたは散々またおしゃべりをして、それがみんな、とんち
んかんだつたじゃないの。七〇年代（訳注　一八七〇年代。
ナロードニキー運動の全盛時代）がどうしたの、デカダン
がどうのつて。しかも相手は誰だつたの？　給仕をつかま
えて、デカダン論をなさるなんて！

ロパーヒン　なるほど。

ガーエフ (片手を振って) わたしのあの癖は、とても直ら
んよ。とても駄目だ…… (癩癩まぎれにヤーシヤに) なん
という奴だ、しよつちゆう人の前をちらちらしおつて……
ヤーシヤ (笑う) わたしや、旦那だんなの声をきくと、つい笑い
たくなるんで。

ガーエフ (妹に) わたしが出てくか、それともこいつが……
ラネーフスカヤ あつちへおいで、ヤーシヤ、さ早く……

ヤーシヤ (ラネーフスカヤ夫人に巾着をわたす) ただ今まい
ります。(やつと噴きだすのをこらえて) はい、ただ今……

(退場)

ロパーヒン お宅の領地は、金満家のデリガーノフが買おう
とされています。競売当日は、大将自身が出馬するという話
です。

ラネーフスカヤ どこでお聞きになつて？

ロパーヒン 町で、もつぱらの評判です。

ガーエフ ヤロスラーヴリの伯母さんから、送つてよこす約束なんだが、いつ幾ら送つてくれるつもりか、それがわからん……

ロパーヒン 幾ら送つてよこされるでしょうか？ 十万？

それとも二十万？

ラネーフスカヤ そうね……一万か——せいぜい一万五千、それで恩にきせられて。

ロパーヒン 失礼ですが、あなたがたのような無分別な、世事にうとい、奇怪千万な人間にや、まだお目にかかったことがありません。ちゃんとロシア語で、お宅の領地が売りに出ていると申しあげているのに、どうもおわかりになら

んようだ。

ラネーフスカヤ 一体どうしろと仰おつしやるの？ 教えてちょうだい、どうすればいいの？

ロパーヒン だから毎日、お教えしてるじゃありませんか。毎日毎日、ひとつ事ばかり申しあげていますよ。桜の園も、宅地も何も、別荘地として貸しに出さなければならん、それを今すぐ、一刻も早くしなければならん、——競売はつい鼻の先へ迫っている、とね！ いいですか！ 別荘にするという最後の肚をきめさえすれば、金は幾らでも出す人があります、それであなたがたは安泰なんです。

ラネーフスカヤ 別荘、別荘客——俗悪だわねえ、失礼だけど。

ガーエフ わたしも全然同感だ。

ロパーヒン わたしはワアツと泣きだすか、どなりだすか、それとも卒倒するかだ。とても堪らん！^{たま} あなたがたのおかげで、くたくたです！
(ガーエフに) あなたは婆あだ、^{ばば}
まるで！

ガーエフ なんとね？

ロパーヒン 婆あですよ！
(行こうとする)

ラネーフスカヤ (おびえて) いいえ、行かないでちょうだい。ここにいて、ねえ。後生だから。何か考えつくかもしれないもの！

ロパーヒン 今さら、なんの考えることが！

ラネーフスカヤ 行かないで、お願い。あなたがいると、とにかく気がまぎれるわ。……(間) わたし、しよつちゅう、何かあるような気がしているの——今にもわたしたちの頭

の上に、家がどきりと崩れてきでもしそうな。

ガーエフ (沈思のていで) 空クツションで隅へ。……ひねつて真ん中へ……

ラネーフスカヤ わたしたち、神さまの前に、あんまり罪を作りすぎたのよ……

ロパーヒン なんです、罪だなんて……

ガーエフ (氷砂糖を口に入れて) 世間じゃ、わたしが全財産を、氷砂糖でしゃぶりつくしたと言っているよ…… (笑う)

ラネーフスカヤ ああ、わたし罪ぶかい女だわ。……まるで気がいみたいに、方図もなくお金を使いまわす癖がある上に、借金するほか能のない男にとついだんです。その夫は、シャンパンがもとで死にました——お酒に目のない人

でしたからね。そのうえまた不幸なことに、わたしはほかの男を恋して、一緒になったの。すると、ちようどその時、——これが最初の天罰で、真つ向からぐさりと来たのが、——ほら、あすこの川で……坊やが溺れ死んだことでした。そこでわたしは、外国へ発つたの。発ちつばなしで、もう二度と帰つてはこまい、あの川も見まい、とおもつてね。……わたしが眼をつぶつて、無我夢中で逃げだしたのに、あの人は追っかけてきたの……情けも容赦もなくね。わたしがマントンの近くに別荘を買つたのも、あの人があそこに病みついたからで、それから三年というもの、わたしは夜も日もホツとするひまがなかった。病人にいびり抜かれて、心がかさかさになってしまいました。とうとう去年、借金の始末に別荘が人手にわたつてしまうと、わたしはパリへ行

きました。そこで、わたしから搾れるだけ搾りあげた挙句、あの人はわたしを捨てて、ほかの女と一緒にになったの。わたし毒をのもうとしました。……われながら浅ましい、世間に顔向けならない気がしてね。……ところが、急に帰りたくなつたの——ロシアへ、生れ故郷へ、ひとり娘のところへね。……（涙をふく）神さま、ああ神さま、どうぞお慈悲で、この罪ぶかい女をお赦ゆるしてくださいまし！ この上の罰は、堪忍かんにんしてくださいまし！（ポケットから電報を出して）今日、パリから来たの。……赦してくれ、帰つて来てくれ、ですつて。……（電報を引裂く）どこかで音楽がきこえるようね。（耳を澄ます）

ガーエフ あれは、こここの有名なユダヤ人の楽団だよ。ほら覚えてるだろう。バイオリンが四つに、フルートとコント

ラバスさ。

ラネーフスカヤ あれ、まだあるの？ なんとかあれを呼んで、夜会を開きたいものね。

ロパーヒン (耳をすまます) 聞えないな…… (小声で口ずさむ) 「金かねのためならドイツっぽうは、ロシア人化ぼかしてフランス人に変える」(笑う) いや、きのうわたしが劇場で見た芝居といったら、じつに滑稽こっけいでしたよ。

ラネーフスカヤ ちつとも滑稽じゃないのよ、きつと。あんたは芝居なんか見ないで、せいぜい自分を眺ながめたほうがよくてよ。なんてあんだの暮しは、不趣味なんでしょう、よけいなおしやべりばかりして。

ロパーヒン そりゃそうです。正直のはなし、われわれの暮しは馬鹿ばかげています。…… (間) うちの親父おやじはどん百姓で、

アホーで、わからず屋で、わたしを学校へやってもくれず、酔っぱらっちゃ殴りつけるだけでした——それも棒つきれでね。底を割って言えば、わたしもご同様、アホーで、でくのぼうなんです。何一つ習ったことはなし、字を書かしたらひどいもんで、とても人さまの前には出せない豚の手ですよ。

ラネーフスカヤ 結婚しなくちゃいけないわ、あなたは。

ロパーヒン なるほど。……そりやそうです。

ラネーフスカヤ うちのワーリヤはどう？ いい子ですよ。

ロパーヒン なるほど。

ラネーフスカヤ あの子は百姓のうちから貰もらわれてきて、あのと通りの働きもんだし、第一あなたを愛していますわ。それにあんただって、とうからお好きなんだし。

ロパーヒン そりやまあ、わたしも嫌いじゃありません。……

いい娘さんです。(間)

ガーエフ わたしを銀行へ世話しよう、と言つてくれる人があるんだがね。年収六千というんだが……。聞いたかね？
ラネーフスカヤ 柄がらでもないわ！ まあ、じつとしてらつしや
い……

フィールルス登場。外套をもつてきたのである。

フィールルス (ガーエフに) さあき、旦那さま、お召しになつて。じめじめして参りましたよ。

ガーエフ (外套を着る) お前には閉口だよ、爺じいや。
フィールルス あきれたお人だ。……今朝だつて、黙つてふら

りとお出かけにはなるし。(彼をじろじろ眺めまわす)

ラネーフスカヤ　なんて年をとったの、お前は。ええフィールス！

フィールス　なんと仰しやいましたので？

ロパーヒン　お前さんがひどく老^ふけたと仰しやるんだよ！

フィールス　長生きしましたからな。いつだったか、嫁をとれと言われた時にや、あなたのお父さまもまだこの世に生れておいでになりませんでしたよ。……(笑う)解放令(訳

注　一八六一年に公布された農奴解放令)が出た時にや、

わたしはもう下男頭になっておりました。あの時わたしは、自由民になるのはご免だと申して、引きつづきご奉公をいたしましたよ。……(間)当時は、忘れもしませんが、みんな面白^{おもしろ}おかしくやっておりますよ。何が面白いのか、自

分たちもわからずにね。

ロパーヒン 昔はまったく好よかったよ。とにかく、存分ひつぱりたいからなあ。

フィールス (よく聞きとれずに) そりやそうとも。昔は、旦那あつての百姓、百姓あつての旦那でしたものねえ。それが今じゃ、てんでんばらばらで、何がなんだかわかりはしねえ。

ガーエフ ちよつと待った、フィールス。あすわたしは、町へ出かけなければならん。ある將軍に引合わせてくれるという約束なんだ。その人が、手形で融通してくれそうなんですね。

ロパーヒン なあに物になりやしませんよ。利子だつて払えるもんですか、まあ安心してらっしゃい。

ラネーフスカヤ このひと寝言を言ってるのよ。將軍なんて、
いるものですか。

トロフィーモフ、アーニヤ、ワーリヤ登場。

ガーエフ さあ、連中がやってきた。

アーニヤ ママがいるわ。

ラネーフスカヤ (優しく) おいで、さ、こつちへ。……二
人とも、いい子ね…… (アーニヤとワーリヤを抱く) わた
しがどんなにあなたがたを愛してるか、わかってくれたら
ねえ。ならんでお坐り^{すわ}、ほらね、こう。

みなみな腰をおろす。

ロパーヒン わが万年大学生先生は、いつもお嬢さんがたと一緒だね。

トロフィーモフ 君の知ったことじゃない。

ロパーヒン この人は、そろそろ五十になるといふのに、相変らずまだ大学生だ。

トロフィーモフ 愚劣な冗談はいい加減にしたまえ。

ロパーヒン 何を怒るんだね、変つてるなあ？

トロフィーモフ ほつといってくれつたら。

ロパーヒン (笑う) ところで一つ伺うけれど、君は僕のことぼくを、なんと思つてるかね？

トロフィーモフ 僕はね、ロパーヒン君。こう思つてますよ——あなたは金持だ、おっつけ百万長者になるだろう。新

陳代謝の意味では、猛獣が必要だ。なんでも手当り次第、食つちまうやつがね。君の存在理由も、要するにそれさ。

一同わらう。

ワーリヤ　ねえペーチャ、あんたは遊星ほしの話でもしたほうが似合うわ。

ラネーフスカヤ　それよか、どう、きのうの話の続きをしたら。

トロフィーモフ　なんの話でしたっけ？

ガーエフ　人間の誇りのことさ。

トロフィーモフ　きのうは、長いこと議論したけれど、けつきよく結論は出ませんでしたね。あなたの言われる意味で

行くと、人間の誇りなるものには、何か神秘的なところがありますね。まあそれも、一説として正しいかも知れませんが。がしかし率直に、きよしんたんかい虚心坦懐に判断してみるとです、そもそもその誇りなるものが怪しいと言わざるを得ない。げんに人間が生理的にも貧弱にできあがつており、その大多数が粗野で、愚かで、すこぶるみじめな境涯きょうがいにある以上、誇りとかなんとかいつても、なんの意味があるでしょうか。自惚うぬぼれはいい加減にして、ただ働くことですよ。

ガーエフ どっちみち死ぬのさ。

トロフィーモフ わかるもんですか？ 第一、死ぬとは一体なんでしょう？ もしかすると、人間には百の感覚があつて、死ぬとそのうちわれわれの知っている五つだけが消滅して、のこる九十五は生き残るのかも知れない。

ラネーフスカヤ　なんてお利口さんなんでしょう、ペーチャ！

……

ロパーヒン　（皮肉に）おつそろしくね！

トロフィーモフ　人類は、しだいに自己の力を充実しつつ、
進歩して行きます。今は人知の及びがたいものでも、いつ
かは身近な、わかり易いものになるでしょう。ただそのた
めには、働かなければならない。真理を探求する人たちを、
全力をあげて援助しなければならんです。今のところ、
わがロシアでは、ごく少数の人が働いているだけで、僕の
知っているかぎりインテリゲンツィヤの大多数は、何一つ
求めもせず、何一つしもせず、差当り勤労に適しません。
インテリなどと自称しながら、召使は「きさま」呼ばわり
する、百姓は動物あつかいにする、ろくろく勉強もせず、

何一つ真面目には読まず、なんにもせず、ただ口先で科学を云々するばかり、芸術だつてろくにわかつちやいない。みんな真面目くさつて、さも厳肅な顔つきをして、厳肅なことばかり口にし、哲学をならべているが、その一方から一人一人の眼の前では、労働者たちがひどい物を食ひ、一部屋に三十人四十人と、枕まくらもしないで寝ている。(訳注)

*以下は上演当時の検閲のため削除されたので、一九〇四年の初版本には、次のようにぼかされていた。——「その一方、われわれの大多数、百中の九十九までが、野蛮人みたいな暮しをして、何かといえは——すぐぶんなぐる、罵倒する、ひどい物を食つて、息のつまるような汚ない所に寝て、どこもかしこも南京虫と、鼻をつく悪臭と、ひどい湿気と、道德的腐敗ばかりです。……で、われわれのやる

麗々しい会話はみんな、ただ自分や他人の眼をくらまさん
ためであることは、言わずして明らかです。ひとつ教えて
いただきたい、——あれほどやかましく喋々ちやうちやうされている託
児所は、一体どこにあるんです？ 読書の家は、どこにあり
ます？ それは小説に出てくるだけで、実際は全然ありや
しない。あるのはただ、泥んどろこと、俗悪と、アジア的野蛮
だけだ。……僕は、真面目くさった顔つきが、身ぶるいす
るほど嫌いきらです。真面目くさった会話にも、身ぶるいが出
る。いつそ黙っていたほうがましですよ。

ロパーヒン いや、わたしはね、毎朝四時すぎに起きだして、
朝から晩まで働きづめでしょっちゅう自分や他人の金を扱っ
ているが、見れば見るほど、まわりの人間いゃが厭いやになるね。
何かちよいと新しい仕事に手をつけさえすりゃ、世間に正

直な、まともな人間がどんなに少ないかが、すぐにわかる。時どき、寝られない晩なんか、こんなことを考えたりしますよ、——「神よ、あなたは実にどえらい森や、はてしもない野原や、底しれぬ地平線をお授けになりました。で、そこに住むからには、われわれも本当は、雲つくような巨人でなければならんはずです……」とね。

ラネーフスカヤ まあ、巨人がご入用ですって……。お伽話ときばなしのなかでこそ、あれもいいいけれど、ほんとは出てきたら怖いわ。

舞台の奥をエピホードフが通りかかって、ギターを弾く。

ラネーフスカヤ (もの思わしげに) エピホードフが歩いて

る。……

アーニヤ （もの思わしげに）エピホードフが歩いてる。

ガーエフ 日が沈んだよ、諸君。

トロフィーモフ そう。

ガーエフ （低い声で、朗読口調で）おお、自然よ、靈妙な
るものよ、おんみは不滅の光明に輝く。われらが母と仰ぐ、
美しく冷やかなおんみは、おのれのうちに生と死を結び合
わす。おんみは物みなを生み、物みなを滅ぼす。……

ワリーヤ （哀願するように）伯父さん！

アーニヤ 伯父さま、また！

トロフィーモフ あなたは、黄玉を空からクッションで真ん中へ、
のほうがいいですよ。

ガーエフ 黙るよ、黙っているよ。

みんな坐つて、物思いに沈む。静寂。聞えるのは、フィールの小声のつぶやきばかり。不意にはるか遠くで、まるで天からひびいたような物音がする。それは弦つるの切れた音で、しだいに悲しげに消えてゆく。

ラネーフスカヤ なんだろう、あれは？

ロパーヒン 知りませんなあ。どこか遠くの鉾山で、巻揚機ウイインチの綱でも切れたんでしょう。しかし、どこかよっぽど遠くですなあ。

ガーエフ もしかすると、何か鳥が舞いおりたのかも知れん……蒼サギあおか何か……。……

トロフィーモフ それとも、大ミミズクかな……

ラネーフスカヤ (身ぶるいして) なんだか厭な気持。(間)
フィールス あの不幸の前にも、やはりこんなことがありま
した。フクロウも啼なきたてたし、サモワールもひつきりな
しに唸うなりましたつけ。

ガーエフ 不幸の前というと？

フィールス 解放令の前でございますよ。(間)

ラネーフスカヤ ねえ皆さん、うちへはいりましようよ、日が
暮れてきたわ。(アーニヤに) まあ、涙なんか溜ためて……。

どうかしたの、アーニヤ？ (抱きよせる)

アーニヤ なんでもないので、ママ。ただ、ちよつと。

トロフィーモフ 誰だれか来る。

浮浪人が出てくる。古ぼけたヒサシ帽をかぶり、外套がいとうを
まとい、少し酔っている。

浮浪人　ちよつとお尋ねしますが、ここをまつすぐ、停車場
へ出られますかね？

ガーエフ　出られますよ。その道をお行きなさい。

浮浪人　ご親切に、おそれ入ります。(咳せきばらいをして)まこ
とによいお天気で……(朗読する)はらからよ、苦しみ悩む
はらからよ。……出いでてみよ、ヴオルガのほとり、聞ゆる
は誰の呻うめきぞ。(訳注　ネクラーフの詩より)……(ワー
リヤに)マドモワゼル、この飢えたるロシアの民に、三十
コペイカほどどうぞ……

ワーリヤおびえて、声を立てる。

ロパーヒン (憤然として) 無作法にも程度というものがあ
るぞ。

ラネーフスカヤ (怖氣おじけづいて) 持つてらっしやい……さあ、
これを…… (巾着きんちやくの中をさがす) 銀貨がないわ。……まあ
いい、さ、この金貨を……

浮浪人 ご親切に、おそれ入ります！ (退場)

笑い。

ワーリヤ (あきれて) わたし行くわ……あっちへ行くわ。……
お母さまったら、うちの人たちに食べさせる物がないとい

うのに、あんな男に金貨をやるなんて。

ラネーフスカヤ わたし馬鹿ばかなんだもの、仕方がないわ！ うちへ帰つたら、わたしの手持ちを残らず渡すからね。ロパーヒンさん、また貸してちょうだい！ ……

ロパーヒン 承知しました。

ラネーフスカヤ さあ行きましよう、皆さん、時刻ですわ。そうそうワリーヤ、さつきここでね、お前の縁談をととのえましたよ、おめでとう。

ワリーヤ (涙なみだごえで) そんなこと、冗談冗談に仰おつしやるもんじやないわ、ママ。

ロパーヒン オフメーリア (訳注 オフィーリアをわざわざ、オストロフスキーの有名な芝居の登場人物の名にもじつたもの。この名は「一杯きげん」の意味を含んでいるおかし

みがある)、ささき尼寺へ……

ガーエフ どうも手がふるえてならん、久しく玉突きをやらないもんだから。

ロパーヒン オフメーリア、おお水妖ニンフよ。躬みが上も祈り添えてたもれ!

ラネーフスカヤ 行きましようよ、皆さん。そろそろお夜食よ。

ワーリヤ あの男のおかげで、ほんとにびつくりしたわ。胸がこんなにドキドキしている。

ロパーヒン 念のため申しあげておきますが、皆さん、八月二十二日には桜の園は競売になります。お考えねがいますよ! ……よくお考えをね! ……

トロフィーモフとアーニヤのほか、一同退場。

アーニヤ (笑いながら) 浮浪人さん、ありがとう。ワーリヤをおどかしてくれたおかげで、やっと二人きりになれたわ。トロフィーモフ ワーリヤはね、僕たちがもしや恋仲になりはしまいかと警戒して、毎日、朝から晩まで、ああして付きつきりなんだ。あの人は、自分の狭い料簡りようけんで、われわれが恋愛を超越していることがわからないんだ。われわれの自由と幸福をさまたげている、あのけちくさい妄想もうそうを追っばらうこと、これが僕らの生活の目的であり意義なんです。進みましょう、前へ！ 僕らは、はるか彼方に輝かなたいている明るい星をめざして、まっしぐらに進むのだ！ 前へ！ おくれるな、友よ！

アーニヤ (手をたたいて) すてきだわ、あなたの話! (間)

今日、ここはなんていいんでしょう!

トロフィーモフ そう、すばらしい天気です。

アーニヤ あなたのおかげで、わたしどうかしてしまつたわ、ペーチャ。なぜわたし、前ほど桜の園が好きでなくなつたのかしら? あんなに、うつとりするほど好きだつたのに、——この世に、うちの庭ほどいい所はないと思つていたのに。

トロフィーモフ ロシアじゅうが、われわれの庭なんです。

大地は宏大こうだいで美しい。すばらしい場所なんか、どつきりありますよ。(間) ね、思つてもご覧なさい、アーニヤ、あなたのお祖父じいさんも、ひいお祖父いさんも、もつと前の先祖も、みんな農奴制度の讚美者さんびしゃで、生きた魂を奴隸どれいにしてしほり

上げていたんです。で、どうです、この庭の桜の一つ一つから、その葉の一枚一枚から、その幹の一本一本から、人間の眼めがあなたを見てはいしませんか、その声があなたには聞えませんか？ ……生二きた魂を、わが物顔にこき使っているうちに——それがあなたがたを皆、むかし生きていた人も、現在いきている人も、すっかり墮落させてしまつて、あなたのお母さんも、あなたも、伯父さんも、自分の腹を痛めずに、他人ひとのふところとこで、暮していることにはもう気がつかない、——あなた方が控室より先へは通さない連中の、ふところとこでね。（訳注 *以下は上演当時の検閲のため削除されたので、一九〇四年の初版本には、次のように言いかえられていた。——「ああ、怖ろしいことだ、お宅の庭は不気味です。晩か夜なかに庭を通り抜けると、桜の木

の古い皮がぼんやり光つて、さも桜の木が、百年二百年まえにあつたことを夢に見ながら、重くるしい幻にうなされているような気がします。いやはや、まつたく！）……われわれは、少なくとも二百年は後れています。ロシアにはまだ、まるで何一つない。過去にたいする断乎だんこたる態度ももたず、われわれはただ哲学をならべて、憂鬱ゆううつをかこつたり、ウオツカを飲んだりしているだけです。だから、これもう明らかじやありませんか、われわれが改めて現在に生きはじめるとは、まずわれわれの過去をあがない、それと縁を切らなければならぬことはね。過去をあがなうには、道は一つしかない、——それは苦惱です。世の常ならぬ、不断の勤勞です。そこをわかつてください、アーニヤ。アーニヤ わたしたちの今住んでいる家は、もうとうに、わた

したちの家じゃないのよ。だからわたし出て行くわ。誓つてよ。

トロフィーモフ もしあなたが、家政の鍵かぎをあずかっているのなら、それを井戸のなかへぶちこんで、出てらっしゃい。そして自由になるんです、風のようにね。

アーニヤ (感激して) それ、すばらしい表現だわ!

トロフィーモフ 信じてください、アーニヤ、僕を信じて! 僕はまだ三十にならない、僕は若い、まだ学生ですが、これですいぶん苦勞はして来ましたよ! 冬になると、たちまち僕は口が乾ひあがって、病みついて、いらいらして、乞食こじきも同然の境涯に落ちこんで、——運命の追うがままに、所きらわずほつき歩いたもんです! それでもやつぱり僕の心は、夜も昼もたえず、いついかなる瞬間にも、一種な

んとも言えぬ予感に満たされていました。僕は幸福を予感
します、アーニヤ、僕にはもうそれが見える……

アーニヤ（もの思わしげに）月が出たわ。

エピホードフが相変らず同じわびしい歌を、ギターで弾い
ているのが聞える。月がのぼる。どこかポプラの木の中へ
んで、ワリーヤがアーニヤをさがしながら、「アーニヤ！
どこにいるの？」と呼んでいる。

トロフィーモフ　そう、月が出ました。（間）そら、あれが幸
福です。もうやって来た、だんだん近づいてくる。僕には
もう、その足音がきこえる。よしんば、僕たちにそれが見
つからず、ああこれだと悟る時がないにしても、それがな

んです？ 誰かが見つけますよ！

ワーリヤの声 アーニヤ！ どこにいるの？

トロフィーモフ またワーリヤだ！ (忌々しいままそうに) 厭に

なるなあ、まったく。

アーニヤ かまわないわ。川のほうへ行きましようよ。あす

こはよくつてよ。

トロフィーモフ 行きましよう。(ふたり歩きだす)

ワーリヤの声 アーニヤ！ アーニヤ！

——幕——

第三幕

アーチで奥の広間と区切られた客間。シャンデリアがともっている。次の間で、ユダヤ人の楽団の演奏がきこえる。二幕目に話に出たあれである。宵よい。広間ではグラン・ロン（訳注 大円舞）の最中。やがて《Promenade a une Paire!》（訳注 一組ずつ行進！）というシメオーノフ＝ピーシチクの掛声がして、順々に舞台へ出てくる。——先頭の組はピーシチクとシャルロッタ、二番目はトロファイーモフとラネーフスカヤ夫人、三番目はアーニヤと郵便官吏、四番目はワーリヤと駅長、等々。ワーリヤは忍び泣きに泣いており、踊りながら涙をふく。最後の組にドウ

ニヤーシヤ。

みなみな客間を一巡して広間へ。ピーシチクの掛声——

《Grand rond, balancez!》(訳注 大円陣、みぎ左へ!)

《Les cavaliers à l'ennemi et remerciez vos dames!》(訳

注 騎士はひざまずいて、貴婦人に謝意を表わす!)

フィールスが燕尾服すがたで、炭酸水を盆にのせて持つて出る。客間にピーシチクとトロフィーモフ登場。

ピーシチク わたしはどうも多血質でね、もう二度も卒中にやられているもんで、踊りはどだい無理なんだが、下世話にもいとうおり、おつきあいなら吠えないまでも、せめて尻尾を振るがよい——だからな。丈夫なことといったら、

わたしは馬もはだしき。わたしの亡なくなった親父は、剽ひょうきん軽な人だったが、——天国に安らわせたまえ——うちの家系のことで、こんなことを言っていたつけ。このシメオーノフルピーシチクという古い家柄いえがらは、どうやらあのカリグラ皇帝（訳注　ローマ三代目の皇帝。暴君で、自分の愛馬に元老院の議席を与えたりした）が元老院の議席につけた例の馬から出ているらしい、とき。……（腰かける）だが、困ったことには、金がない！　かつえた犬には肉こそ黄金こばん、といつてな。……（いびきをかき、すぐまた目を覚ます）わたしもそれき……金のことしか頭にないのさ……

トロフィーモフ　そう言えば、あなたの格好には、実際にか馬に通ずるところがありますね。

ピーシチク　なあに……馬はいい獣だ……だいいち売れるか

らな……

となりの部屋で、玉突き音がする。広間のアーチの下に、ワーリヤが姿を見せる。

トロフィーモフ (からかつて) マダム・ロパーヒン! マ

ダム・ロパーヒン! ……

ワーリヤ (ムツとして) 禿はげの旦だんな那!

トロフィーモフ いかにも、僕ぼくは禿はげの旦だんな那だ、それを誇り
としてるんだ!

ワーリヤ (くよくよ案じながら) 楽隊をやとったりして、払
いはどうするつもりかしら?
(退場)

トロフィーモフ (ピーシチクに) あなたが一生のあいだに

利子を払う金の工面に費やしたエネルギーが、何かもしいかのことに向けられたとしたら、おそらくあなたはとどのつまり、地球をひっくり返すこともできたろうになあ。

ピーシチク ニーチェがね……哲学者の……誰だれしらぬ者もない、えら物ぶつちゆうのえら物の……あのすごい知恵者がな、その著述のなかで、にせ札は作ってもいいとか言っているが。

トロフィーモフ あなたは、ニーチェを読んだんですか？

ピーシチク いや、なに。……うちのダーシエンカが話して

くれたのさ。ところで現在わたしは、ええ一つ、にせ札でも作つてやろうか、といった土壇場どたんばでな。……あさつて三百十

ルーブリ払わにやならん……百三十はやつとできたが……（ポケットをさわつてみて、あわてて）金がなくなつた！ 金

を落したぞ！ (泣き声で) どこへ行つたんだらう？ (嬉うれ
しそうに) ああ、あつた、服の裏へもぐりこんでいた。……
やれやれ、冷汗が出たわい……

ラネーフスカヤとシャルロツタ登場。

ラネーフスカヤ (コーカサスの舞曲を口ずさむ) レオニー
ドは、どうしてこう遅いのだらう？ 町で何をしているの
かしら？ (ドウニヤーシャに) ドウニヤーシャ、楽隊の
人にお茶をあげて……

トロフィーモフ 競売はお流れになつたんですよ、きつとそ
うです。

ラネーフスカヤ 楽隊の来たのも折が悪かつたし、舞踏会も

生憎あいにくの時に開いたものだわ。……まあ、いいさ。……（腰かけて、そつと口ずさむ）

シャルロット （ピーシチクにカードを一組わたす）さあ、カードを一組あげましたよ。どれか一枚だけ、頭のなかで考えてください。

ピーシチク 考えました。

シャルロット では、よく切つてください。大そう結構。こちらへ頂かしてください、おお、いとしいピーシチクさん。

アイン ツワイ ドライ

一、二、三！ さあ、捜してごらんなさい、その札はあなたの脇わきポケットにあります……

ピーシチク （脇ポケットからカードを取りだす）スペードの八、まさにその通り！（驚嘆して）こりゃ、どうだ！シャルロット （手の平にカードを一組のせて、トロフィー

モフに）早く言つてください、一ばん上のカードは？

トロフィーモフ なにさ？ じゃ、スピードのクイン。

シャルロット はい！ （ピーシチクに）では？ 一ばん上

のカードは？

ピーシチク ハートのエース。

シャルロット はい！ ……（手の平を打つ、カードの一組き

え失^うせる）さて、今日はなんていいお天気でしょう！ （不

可思議な女の声が、さながら床下からひびくように答える、

——「ええ、ほんとに、いいお天気ですこと、奥さん」あな

たは、なんとも申しぶんのない、わたしの理想の人よ。……

（声、——「わたしも、奥さん、あなたが大好きです」）

駅長 （拍手する）よう、腹話術の名人、ブラヴォー！

ピーシチク （驚嘆して）こりや、どうだ！ いや、あなた

は魔女か妖精か、シャルロットさん……わしはすつかりあ
んたに惚ほれましたよ……

シャルロット 惚れたですつて？ (肩をすくめて) あなたに恋

ができませんでした？ Guter Mensch, aber schlechter Musikant.

(訳注 ドイツ語。「人はいいが音楽は下手」)

トロフィーモフ (ピーシチクの肩をたたいて) まったく、な
んて馬だろう、あんたは……

シャルロット では皆さん、もう一番、手品をご覧に入れま
す。(椅子いすから格子こうしじま縞の膝掛ひざかけを取る) これは飛びきり極上
の羅紗ラシヤでございます、これをお売りいたします…… (振つ
てみせる) 買いたい方はありませんか？

ピーシチク (驚いて) こりやどうだ！

シャルロット アイン・ツワイ・ドライ！ (おろした布を

パツと上げる。布のうしろにアーニヤが立っている。彼女は膝をかがめて会釈えしやくをして、母親へ走り寄り、抱擁して、満座熱狂のうちに広間へ駆けもどる)

ラネーフスカヤ (拍手して) ブラヴオー、ブラヴオー! ……
シャルロツタ では、もう一番! アイン・ツワイ・ドライ!
(布を上げると、うしろにワーリヤが立って、おじぎをする)
ピーシチク (驚いて) こりや、どうだ!

シャルロツタ はい、おしまい! (布をピーシチクに投げかけ、膝をかがめて会釈し、広間へ走り去る)

ピーシチク (いそいで追いかけながら) この悪者……いや
はや! なんと! (退場)

ラネーフスカヤ でも、レオニードはまだね。何を町でぐずぐずしてるんだらう、変だこと! 領地が売れたにしろ、競

売がお流れになつたにしろ、どつちみちケリがついては
はずなのに、なんだつていつまでも知らせてくれないのか
しら！

ワリーヤ （なだめようと懸命に） 伯父さんが落札なすつた
のよ、きつとですわ。

トロフィーモフ （冷笑的に） なるほどね。

ワリーヤ おばあさんから伯父さんへ、委任状が来ましたの
よ——おばあさんの名義で買い戻して、借金は肩代りにす
るようにつて。アーニヤのために計らつてくださつたんで
すわ。だからわたし、それが神さまに通じて、伯父さんが
落札なさるに違いないと思うの。

ラネーフスカヤ ヤロスラーヴリのおばあさまが、ご自分の
名義で領地をかうようにつて、送つてくださったお金は一

万五千ルーブリなのよ、——わたしたち信用がないんだわ、
——そんなお金じゃ、利子の払いにも足りやしない。(両手
で顔をおおう) 今日こそ、わたしの運命のきまる日よ、運
命の……

トロフィーモフ (ワーリヤをからかう) マダム・ロパーヒ
ン!

ワーリヤ (怒って) 万年大学生! 二度ももう、大学を追
い出されたくせに。

ラネーフスカヤ 何をおこるのさ、ワーリヤ? この人が、
ロパーヒンのことでお前をからかったって、それがなんで
す? 嫁いきたければ——ロパーヒンの嫁になるがいいわ。
あれは見どころのある、いい人間なもの。いやなら——嫁い
かないがいいのさ。誰もお前を、束縛しやしない。……

ワリーヤ わたし正直に言えば、このことは真剣に考えていますの。あの人はいい人間で、わたし好きですわ。

ラネーフスカヤ じゃ、嫁いつたらいいじゃない。何を待つことがあるの、気が知れないわ！

ワリーヤ だって、お母さん、自分であの人に申込みをするわけには行きませんもの。現にこの二年というもの、みんながわたしに、あの人のことを言うの、寄つてたかつてね。ところがあの人は、黙っているか、冗談にまぎらしてしまふかですの。それもわかるわ。あの人はますますお金ができて、事業で忙しくて、わたしどころじゃないのよ。もしもわたし、お金があつたら、——たとえ少しでも、せめて百ルーブリでもあつたら、わたしは何もかもうつちやつて、身をかくしてしまふわ。尼寺へはいつてしまふわ。

トロフィーモフ　そいつはすばらしい！

ワリーヤ　（トロフィーモフに）大学生は、も少し利口なもののよ！（口調を柔らかげて、泣き声で）なんてあなた、風采ふうさいが落ちたの、ペーチャ、なんて老ふけてしまったのよ！（もう泣かずに、ラネーフスカヤ夫人に）ただね、こうして仕事をしないでいるのが辛つらいのよ、ママ。わたし、一分一秒、何かせずにはいられないの。

ヤーシャ登場。

ヤーシャ　（やつと笑いをこらえながら）エピソードが、
撞球棒キユリを折りました！……（退場）

ワリーヤ　なんだってエピソードがいるの？　誰があれに、

玉突きをしろと言いました？ あの人の気が知れないわ。……（退場）

ラネーフスカヤ あの子をからかわないでね、ペーチャ、ただでさえ、苦勞の多い子なんですから。

トロフィーモフ お節介すぎますよ、あの人は、ひとの事にま
でくちばしを入れたりして。この夏じゅう、僕もアーニヤも
じつに悩まされた、——ふたりの間にロマンスでも起りや
しないかと、それがあのひと心配で堪^{たま}らないんです。あの
人の知ったことですか？ おまけに僕は、そんな気振^{けぶ}りも
見せないのにね。僕はそれほど俗悪じゃありませんよ。わ
れわれは恋愛を超越してるんです！

ラネーフスカヤ じゃ、きつと、わたしは恋愛以下なのね。
（はげしい不安に駆られて）レオニードはどうしたんだろ

う？ 領地が売れたかどうか、それだけでもわかればねえ！
わたし今度の災難が、あんまり嘘うそみたいだもんだから、何を考えたものやら、見当さえつかずに、ぼおつとしているの。……今にもわたし、大声でわめきだすか……何か馬鹿ばかなまねをしそうだわ。わたしを助けて、ペーチャ。何か話をしてちょうだい、ね、何か……

トロフィーモフ 領地が今日売れようと売れまいと——同じことじゃありませんか？ あれとはもう、とつくに縁が切れて、今さら元へは戻りません、昔の夢ですよ。気を落ちつけてください、奥さん。いつまでも自分をごまかして、勝手に、せめて一生に一度でも、真実をまともに見ることで

ラネーフスカヤ 真実をねえ？ そりやあなたなら、どれが

真実でどれがウソか、はつきり見えるでしょうけれど、わたし、なんだか眼が霞めんでしまったみたいで、何一つ見えないの。あなたはどんな重大な問題でも、勇敢にズバリと決めてしまいなさるけれど、でもどうでしょう、それはまだあなたが若くって、何一つ自分の問題を苦しみ抜いたことがないからじゃないかしら？ あなたが勇敢に前のほうばかり見ているのも、元をただせば、まだ本当の人生の姿があなたの若い眼から匿かくされているので、怖いものなしなんだからじゃないかしら？ わたしたちに比べれば、あなたはずっと勇敢で、正直で、深刻だけれど、もっとよく考えてね、爪つめの先ほどでもいいから寛大な気持になつて、わたしを大目に見てちょうだい。だってわたしは、ここで生れたんだし、お父さんもお母さんも、お祖父じいさんも、ここに

住んでいたんですもの。わたしはこの家がしんから好きだし、桜の園のないわたしの生活なんか、だいいち考えられやしない。どうしても売らなければいけないのなら、いつそこのわたしも、庭と一緒に売ってちょうだい。……（トロフィーモフを抱きしめて、その額にキスする）坊やもここで、溺れ死おぼんだんですものね。……（泣く）わたしを哀れと思つて、ね、あなたは親切な、いい人ですもの。

トロフィーモフ　ぼくが心しんから同情してることに、ご存じじゃないですか。

ラネーフスカヤ　そんならそれで、何かもつと、別の言い方があるはずだわ。……（ハンカチを取りだす拍子に、電報がゆかへ落ちる）わたし今日は気が重くてならない。この気持、とてもあなたにはわからないわ。ここは騒々しくつ

て、物音一つするごとに、胸がドキリとする。からだじゅう、ふるえてくる。でも、居間へ引っこむわけにもいかない。静かなところに、一人でいるのはやりきれないもの。わたしを責めないでね、ペーチャ。……わたしあなたが好きで、他人のような気がしない。あなたになら、わたし喜んでアーニヤを上げるわ、ほんとによ。でもただね、あなたは勉強しなくちゃ駄目、卒業しなくちゃね。あなたはなんにもせず、運命のままにふらふらしてなざるけれど、ほんとに妙だわ。……そうじゃなくて？　ね？　それに、その顎ひげだつて生やすなら生やすで、も少しなんとかしなくちゃねえ。……（笑う）可笑しな人！

トロフィーモフ　（電報を拾つて）僕は好男子になりたかありません。

ラネーフスカヤ　これ、パリから来た電報なの。毎日くるのよ。きのうも今日も。あのガムシヤラ屋さんは、また病気になつて、工合がわるいの。……どうぞ赦ゆるしてくれ、どうぞ帰つて来てくれ、と言うんだけれど、考えてみればやっぱり、わたしパリへ行つて、あの人のそばにいてやるのが本当なのね。あなたは、むずかしい顔をしてるけれど、ねえペーチャ、わたし、どうしようもないじゃないの！　あの人は病気で、一人ぼつちで、辛い目にあつてるといふのに、誰があの人のお世話をするの、誰があの人にケガのないようにお守りもをするの、誰が時間どおりに薬をのませるの？　今さら包みかくしたところでしょうはないわ、わたしあの人を愛しています、そりや明白よ。愛している、愛してますとも。……それはわたしの頸くびに結むすえつけられた重石おもしで、

その道づれになつてわたしは、ぐんぐん沈んで行くけれど、
やっぱりその重石が思いきれず、それが無いじゃ生きて行け
ないの。(トロフィーモフの手を握る) 悪く思わないでね、
ペーチャ、わたしに何も言わないで、ね、言わないで……
トロフィーモフ (涙ごえで) 率直に言わせてください、お
願いです。あの男は、あなたからすつかり捲まきあげたじや
ないですか!

ラネーフスカヤ いや、いや、いや、それを言わないで……
(両耳をふさぐ)

トロフィーモフ あいつは碌ろくでなしです、それを知らないの
はあなたただけだ! あいつはケチなやくざ野郎で、虫けら
みたいなの……

ラネーフスカヤ (ムツとするが、じつところらえて) あなた

は二十六か七のはずね。だのに、まるで中学の二年生みた
い！

トロフィーモフ かまやしません！

ラネーフスカヤ もっと大人にならなけりや駄目よ。あなた
の年になれば、恋をする人の気持ぐらい、わからなければ
ね。そして自分も恋をしなくてはね……夢中になつてね！

(腹だたしげに) そうよ、そうですとも！ あんただつて、
純潔なんかあるもんですか。ただ気どつてるだけよ、滑稽
な変り者よ、片輪よ……

トロフィーモフ (呆氣あっけにとられて) 何を言うんだ、この人
は！

ラネーフスカヤ 「恋愛を超越してる」ですつて！ 超越す
るところか、あんたはうちのフィールの言うように、こ

の出来そこねえめ、ですよ。その年をして、恋人ひとりいないなんて！ ……

トロフィーモフ (仰天して) こりや、ひどい！ 何を言い

出すんだ?! (頭をかかえて、広間へ急ぐ) まったくひど

い。…とでもたまらん、僕は行こう… (退場。しかし

すぐ戻って来て) もうあなたとは絶交です！ (次の間へ

退場)

ラネーフスカヤ (うしろから叫ぶ) ペーチャ、待つてちよ

うだい！ おかしな人ね、ちよつと冗談いっただけじゃな

いの！ ペーチャ！

次の間の階段を、誰かが大急ぎで登って行く足音がし、とつぜんドシンと落ちる音がする。アーニヤとワーリヤ

の叫び声。しかしすぐ笑い声になる。

ラネーフスカヤ おや、どうしたんだらう？

アーニヤが駆けこむ。

アーニヤ (笑いながら) ペーチャがね、階段から落つこち

たの！ (走り去る)

ラネーフスカヤ なんておかしな人だらう、あのペーチャ

は……

駅長が広間の真ん中に立ちどまって、A・K・トルスト
イの『罪の女』(訳注) ロシア十九世紀の詩人・劇作家ト

ルストイの叙事詩。次にその数行を例示する。——「若き罪の女は、杯をほしつつ、／その間に坐せり。／そのきらびやかによそおいは／人みな目の目をうばう、／その毒々しき髪かざりは／罪の女のなりわいを語る」を朗読する。一同謹聴するが、何行も読まないうちに次の間からワルツのひびきが流れてきて、朗読は中絶する。一同おどる。次の間から、トロフィーモフ、アーニヤ、ワーリヤ、ラネーフスカヤが出てきて、舞台にかかる。

ラネーフスカヤ　ねえ、ペーチャ……その純潔な心で、わたしを赦してちょうだい、……さ、一緒に踊りましょう。……
(ペーチャと踊る)

アーニヤもワーリヤも踊る。

フィールスがはいつてきて、自分の杖つえを横手のドアのそばに立てかける。ヤーシヤも客間からはいつて来て、ダンスを見物する。

ヤーシヤ どうした、爺じいさん？

フィールス 加減がわるくてな。昔はうちの舞踏会といやあ、將軍さまだの男爵だんしやくだの提督閣下だのが踊りに来なすつたもんだが、それが今じゃ、郵便のお役人だの駅長だのを迎えにやつて、それさえいい顔をして来やしない。どうもわしも、めつきり弱くなつたよ。亡なくなつた大旦那おおだんなさまは、みんなの病気を、いつも封蝨ふうろうしで療治なすつたものだ。今でもわしは、毎にち封蝨をのんでるが、これでもう二十六年か、

その上にもなるかな。わしがこうして生きているのは、そのおかげかも知れんて。

ヤーシヤ お前さんの話にも、あきあきするよ、爺さん。（あくび）いつそさつさと、くたばつちまえばいいになあ。

フィールス ええ、この……出来そこねえめが！ （ぶつぶつぶちやぶちやぶ）

トロフィーモフとラネーフスカヤが広間で踊り、やがて客間で踊る。

ラネーフスカヤ ありメがブルとうシ。わたし、ちよつと休みます。
……（腰かける）疲れたわ。

アーニヤ登場。

アーニヤ（わくわくして）いま台所で、どこかの人が、桜の園は今日、売れてしまったと話していたわ。

ラネーフスカヤ 誰だれが買ったの。

アーニヤ 誰とも言わずに、行つてしまったの。（トロフィーモフと踊る。ふたり広間へ去る）

ヤーシヤ それはね、どこかの爺さんがしゃべってたんでさあ、よそもんでしたがね。

フィールス 旦那さまは、まだ見えない、まだお帰りが無い。

外套がいとうは、薄い合着を召してお出かけだったが、もしや風邪でもお引きにならないけりやいいが、いやはや、若い人というもんは！

ラネーフスカヤ わたし、今にも死にそうだ。ヤーシヤ、向うへ行つて聞いてきておくれ、誰が買ったのだから。

ヤーシヤ でも、とつくに行つてしまいましたよ、その爺さんんは。(笑う)

ラネーフスカヤ (いささかムツとして) まあ、何を笑うの、お前は？ 何が嬉しいうれいの？

ヤーシヤ あんまり、エピソードのやつがおかしいもんで。いや、つまらん男で。二十二の不仕合せ。

ラネーフスカヤ フィールス、この領地が売れてしまったら、おまえどこへ行いくつもり？

フィールス 仰おせのままに、どこへでも参ります。

ラネーフスカヤ お前、どうしてそんな顔をしてるの？ 加減でも悪いの？ 向うへ行つて、やすんだらどう？ ……

フィールスへえ。……（にやりと笑つて）そりや、さがつて休むのも宜しいけれど、あとは誰が給仕をいたします。誰が采配を振ります？　うちじゆうに、一人でございますよ。

ヤーシャ　（ラネーフスカヤ夫人に）奥さま！　じつはお願いの筋がありますんですが、どうぞお聞きになつて下さい！　もしまたパリへお出かけになるようでしたら、後生でございます、わたしにお伴ともさせてくださいまし。ここにおりますことは、絶対に不可能なんでして。（あたりを見まわし、声をひそめて）今さら申上げるまでもなく、ご自身とうにご存知のとおり、何しろ無教育な国で、民衆は品行がわるいし、それに退屈で、お勝手の食べ物ときたら目もあてられませんし、おまけにあのフィールスのやつが、うろうろしておつて、色々と愚にもつかんことを、ぼそついで

おりますしねえ。わたしをお連れくださいまし、お願いで
ございます！

ピーシチク登場。

ピーシチク どうぞ奥さん……ワルツを一番ねがいます……
(ラネーフスカヤ、彼と歩きだす) 天女のような奥さん、と
にかく百八十八ルーパーリは拝借しますよ……。ぜひ拝借しま
すよ……。 (踊る) 百八十八ルーパーリ……。 (広間へ移る)
ヤーシヤ (そつと口ずさむ) 「きみ知るや、わが胸のこの痛
み……」

広間で、灰色のシルクハットに格子縞こうしじまのズボンをはいた人

物が、両手を振ったり跳ねあがったりする。「ブラヴオー、シャルロットさん、大出来、シャルロットさん！」と口ぐちに叫ぶ。

ドウニヤーシャ　（立ちどまつて、白粉おしろいをはたく）お嬢さまつたら、あたしにも踊れつて仰おっしやるのよ——殿がたは大勢なのに、婦人が少ないからつて。——でもあたし、踊ったおかげで目まいがするわ、心臓がどきどきするわ。ちよいとフィールスさん、今しがた郵便のお役人さんが、あたしに大変なことを仰しやつたの、あたし息がとまりそうになつちやつた。

音楽がしずまる。

フィールズ　なんと仰しやつたかい？

ドウニヤーシャ　あんたは花のようだ、ですつて。

ヤーシャ　（あくび）無学な連中だ……（退場）

ドウニヤーシャ　花のようだ、ですつて。……あたし、そりゃ

デリケートな娘だもので、うつとりするような言葉が大好き。

フィールズ　そろそろおっぱじめるな、お前さんも。

エピホードフ登場。

エピホードフ　ああ、ドウニヤーシャさん、あなたは僕を見
るのが、さも厭いやそうですね……虫けらかなんそのように。

(ため息をつく) あわれ人生よ、だ！

ドウニヤーシャ 何のご用ですか？

エピソードももちろんそりゃ、あなたの方が正しいのかも知れない。(嘆息する) しかし無論ですな、その……ある観点からすると、あなたという方は、まあ率直に言わせて頂くとですな、要するに僕を、こんな精神状態に落し入れてしまったと、あえて言わざるを得んです。僕は自分の宿命を承知している。僕の身には、毎日かならず何かしら不仕合せが起るし、僕はもうとうに馴なれつこになつて、おのれが運命を微笑をもつて眺ながめています。要するにですな、あなたは一たん約束された。で、よしんば僕が……

ドウニヤーシャ どうぞそのお話は、のちほどに願いますわ。今はあたしを、そつとしておいてちょうだい。だって、空

想してるんですもの。(扇をもてあそぶ)

エ。ピホードフ 僕は毎日不仕合せにぶつかります。しかし僕は、あえて言えばですな、ただ微笑しています、いや、ハッハッハと笑ってさえいます。

広間からワーリヤ登場。

ワーリヤ お前まだここにいたの、エ。ピホードフ？ ほんとに、なんていい加減な人間だろう。(ドウニヤーシヤに) お前もあつちへおいで、ドウニヤーシヤ。(エ。ピホードフに) 玉突きをしてキューを折ったかと思えば、お客さま^{づら}面をして客間を歩きまわったりして。

エ。ピホードフ こう申しては失礼ですが、あなたからお小言

を頂く筋合いはありません。

ワリーヤ 小言なんか言つてやしない、話をしているんだよ。することと言つたら、仕事はそつちのけで、ふらふら歩きまわることばかり。せつかく執事をやとっても、なんのためやら——わかりやしない。

エピソードフ (ムツとして) わたしが仕事をしようと、歩きまわろうと、食べようと、玉を突こうと、それについてとやかく仰しやれるのは、物のわかつた人か目上のかただけですよ。

ワリーヤ よくも言えたね、わたしにそんなことが！ (カツとなつて) 言つたわね？ つまりわたしが、わからずやだと言うんだね？ とつとと出てくがいい！ さあ今すぐ！
エピソードフ (怖^{おし}気づいて) もう少々その、デリケートな

言葉で、どうぞ。

ワリーヤ (われを忘れて) さっきと出てけったら! さ、出てけ!
(エピホードフがドアの方へ行くのを、彼女は追う) 二十二の不仕合せめ! お前のおいがプンとでもしたら承知しないよ! 二度とその顔を見せてもらうまい!
(エピホードフ退場。ドアの向うで、「あなたのことを、言いつけますからね」という彼の声がする) おや、また返つて来るんだね? (フィールスがドアのそばに立てかけておいた杖をつかむ) さあ来い……来るならおいで、目にものを見せてやるから。……来るんだね? え、来るんだね? よおし、こうしてやる…… (杖をふりあげる、とたんに口パーヒン登場)
口パーヒン これはどうも恐縮。

ワリーヤ (怒りと嘲笑をまぜて) 失礼!

ロパーヒン どうしまして。結構なご馳走で、あつくお礼を。

ワリーヤ 礼には及びません。(その場から離れ、やがて振り

かえつて、やさしく尋ねる) お怪我はなかつたかしら?

ロパーヒン いや、なあに。もつとも、でつかい瘤ぐらいで
きそうですがね。

広間の声々 ロパーヒンが来た! ロパーヒンさんだわ!

ピーシチク いよう、これはこれは、ようこそご入来……(口

パーヒンにキスする) この可愛い男は、ちよつぴりコニヤツ

クの匂いがするな、おい君。われわれもこの通り、愉快に

やつとるよ。

ラネーフスカヤ夫人登場。

ラネーフスカヤ　まあ、あなたでしたの、ロパーヒンさん？
どうしてこんなに遅かったの？　レオニードはどうしまし
て？

ロパーヒン　お兄さまも、一緒に戻もどられました。すぐ見えま
す……

ラネーフスカヤ　（わくわくしながら）で、どうでしたの？
競売はありました？　さ、話してちょうだい！

ロパーヒン　（嬉しさを外へ出すまいとして、しどろもどろ
に）競売は四時ちかくに終わりました。……わたしたちは汽
車に乗りおくれたもので、九時半まで待たにやならなかつ
たんです。（苦しそうに息をついて）ふうっ！　すこし頭が
ぐらぐらする……

ガーエフ登場。右手には買物をさげ、左手で涙をふいている。

ラネーフスカヤ リヨーニヤ、どうだったの！ ねえ、リヨーニヤ！（じりじりして、涙ぐんで）早くして、後生だから……

ガーエフ （一言も答えず、ただ片手を振る。泣きながらファイルスに）これを取ってくれ。……アンチヨビイと、ケルチ（訳注 クリミア半島の東端）のニシンとだ。……わたしは今日、なんにも食べなかつたよ。……ああ、まったくひどい目に会った！（玉突き部屋へのドアがあいていて、球の音と、ヤーシヤが「七と十八！」という声がき

こえる。ガーエフの表情が変わって、もう泣かずに）いやもう、へとへとだ。なあフィールス、着がえさせてくれ。（広間を抜けて自分の居間へ去る。フィールスつづく）

ピーシチク どうだったね、競売は？ 話してくれよ、さあ！
ラネーフスカヤ 売れたの、桜の園は？

ロパーヒン 売れました。

ラネーフスカヤ 誰が買ったの？

ロパーヒン わたしが買いました。（間）

ラネーフスカヤ夫人、がつくりとなる。もし肘ひじかけ椅子いすとテーブルのそばに立っていないかきたばなかつたら、倒れたにちがいない。ワーリヤはバンドから鍵束かぎたばをはずし、それを客間中央の床へ投げつけて退場。

ロパーヒン わたしが買ったんです！ ちよつと待つてくだ
さい、皆さん、お願いです。わたしは頭がぼおつとしてし
まつて、ものが言えないんです。……（笑う）わたしたちが
競売場に着いてみると、デリガーノフはもう来ていました。
ガーエフさんには、たった一万五千しかないのに、あのデ
リガーノフはいきなり、抵当額の上に三万と吹っかけてき
ました。こいつはいかんと思つて、わたしはやつを向うに
まわして、四万と打つて出た。向うは四万五千とくる。そ
こでこつちは五万五千。つまり、やつは五千ずつ上げてく
るのに、わたしは一万ずつ上げて行つた。……やがて、ケ
リがついた。抵当額の上に、わたしは九万と踏んばつて、
まんまと落したんです。桜の園は、もうわたしのものだ！

わたしのものなんだ！（からからと笑う）ああどうしたことだ、皆さん、桜の園がわたしのものだなんて！ 言いたいなら言うがいい、わたしが酔っているとしても、気が変だとも、夢を見てるんだとでも……（足を踏み鳴らす）わたしを笑わないでください！ うちの親父おやじや祖父じいさんが、墓の下から出てきて、この始末を見たらどうだろう。あのエルモライが、なぐられてばかりいた、字もろくすっぽ書けないエルモライが——冬でもはだしで駆けまわっていたあの餓鬼が、まぎれもないそのエルモライが、世界じゅうに比べものもない美しい領地を、買ったのだ。そこでは親父も祖父さんも奴隷どれいだった、台所へさえ通しちやもらえなかった、その領地をわたしが買ったのだ。わたしが寝ぼけてるって、ただの夢だつて、……気の迷いだつて。……とんでもない、

それこそあなたがたの得手勝手な想像の、無知のやみに包まれた産物まぼろしなのだ。……（鍵束を拾いあげ、うつとりほほえみながら）鍵を投げてつたな。もうこのの主婦ではないというところを、見せようっていうんだな。……（鍵束をがちやつかせる）ふん、まあどつちでもいい。（オーケストラの調子を合せる音がきこえる）おおい、楽隊、やってくれ、おれが聴いてやるぞ！ みんな来て見物するがいい、このエルモライ・ロパーヒンが桜の園おのに斧をくらわせるんだ、木がばたばた地面へ倒れるんだ！ どしどしここへ別荘を建てて、うちの孫や曾孫ひいまたいのやつらに、新しい生活を持ませてやるぞ。……楽隊、やってくれ！

音楽がはじまる。ラネーフスカヤ夫人は椅子に沈みこん

で、はげしく泣く。

ロパーヒン (責めるように) 一体なぜ、なんだってあなたは、わたしの言うことを聴かなかったんです？ わたしの大事な奥さん、お気の毒ですが、今となってはとり返しがつきません。(涙ぐんで) ああ早く、こんなことが過ぎてしまえばいい。なんとかして早く、今のようながたぴしした、まえばいい。あもしろ 面白くもない生活が、がらりと変ってしまえばいい。

ピーシチク (彼の腕をかかえて、小声で) この人は泣いてるよ。な、広間へ行こう、一人にしてあげたほうがいい。……行こうや。…… (腕をかかえて。広間へ連れ去る)

ロパーヒン どうしたんだ？ 楽隊、すっかりやらんか！ なんでも、おれの注文どおりやるんだ！ (皮肉に) 新しい

地主のお通りだ、桜の園のご主人さまのな！（うつかり
小テーブルにぶつかり、枝付燭台しよくだいをひっくり返しそうにな
る）なんでも代は払ってやるぞ！（ピーシチクとともに
退場）

広間にも客間にも、ラネーフスカヤ夫人のほか誰もいな
い。彼女は腰かけたなり、全身をすぼめて、はげしく泣
いている。ひそやかな奏楽の音。いそぎ足でアーニヤと
トロフィーモフ登場。アーニヤは母のそばへ寄り、その
前にひざまずく。トロフィーモフは、広間の入口に立つ。

アーニヤ ママ！ ……泣いてらっしやるの、ママ？ いと
しい、親切的な、やさしい、ママ。わたしの大事なママ、わた

しあなたを愛していますわ。……わたし、お祝いを言いたいの。桜の園は売られました、もうなくなつてしまいました。それは本当よ、本当よ。でも泣かないでね、ママ、あなたには、まだ先の生活があるわ。そのやさしい、清らかな心もあるわ。……さ、一緒に行きましょう、出て行きましょうよ、ねえ、ママ、ここから！ ……わたしたち、新しい庭を作りましょう、これよりずっと立派なのをね。それをご覧になつたら、ああそうかと、おわかりになるわ。そして悦びよろこびが——静かな、ふかい悦びが、まるで夕方の太陽のように、あなたの胸に射さしこんできて、きつとニッコリお笑いになるわ、ママ！ 行きましょう、ね、大事なママ！ 行きましょうよ！ ……

第四幕

舞台は第一幕に同じ。ただし窓のカーテンも壁の画えもなく、残っている僅わずかの家具も一隅いちぐうに積みかさねられて、さしずめ売物とでもいった形。がらんとした感じがする。出口のドアのそばと舞台の裏とに、トランクや旅行用の包みなどが、積みかさねてある。左手のドアは開けはなして、そこからワーリヤとアーニヤの声がきこえる。

ロパーヒンが立つて、待ち受けている。ヤーシャは、シャパンのついでである小さなグラスを並べた盆をささげている。次の間ではエピソードが、箱なわに縄なわをかけている。舞台裏手で、がやがやいう声。百姓たちが、お別れに来

ているのだ。ガーエフの声で、

「いやありがとう、みんな、どうもありがとう」

ヤーシヤ 下じもの連中が、お別れにやつて来た。わたしはね、こういう意見なんです、ロパーヒンさん、民衆は善良だけれど、どうも物わかりが悪いとね。

騒ぎが静まる。次の間を通つて、ラネーフスカヤとガーエフが登場。彼女は泣いてはいないが、真まつ蒼さおで、顔がびくびくふるえて、口が利きけない。

ガーエフ お前はあの連中に、財布をやっちゃったね、リュウバ。それじゃいかん！ それじゃいかんよ！

ラネーフスカヤ わたし駄目^{だめ}なの！ わたし駄目なんだから！

ふたり退場。

ロパーヒン (ドアの口から、ふたりの後ろへ) どうぞこちらへ、お願いします！ お別れにほんの一杯。うっかり町から持つて来るのを忘れたもので、停車場でやっと一本だけ見つけました。さあどうぞ！ (間) これは、皆さん！

おいやですか？ (ドアの口から離れる) そうと知ったら——買うんじゃないかった。じゃ、わたしも飲むのはよそう。(ヤーシヤは用心しいしい盆をテーブルに置く) ヤーシヤ、せめてお前でも飲んでくれ。

ヤーシヤ 旅立ちを祝します！ 残られる方がたもご息災で！

(飲む) このシャンパンは、本物じゃありませんぜ。うけあいできあ。

ロパーヒン 一本八ルーブリしたがな。(間) ここは、やけに寒いなあ。

ヤーシヤ 今日(今日は)は焚(た)かなかつたんでね、どうせ行つちまうんですからね。(笑う)

ロパーヒン 何がおかしいんだ？

ヤーシヤ つい嬉(うれ)しくつてね。

ロパーヒン もう十月だというのに、そとは日が照つて、おだやかで、まるで夏みたいだ。普(ふ)請(しん)には打(う)つてつけどな。

(時計を出してみて、ドアの口へ) 皆さん、よろしいですか、発車までに四十七分しかありませんよ！ すると、二十分したら停車場へお出かけになるわけです。少々お急ぎ願

ますよ。

トロフィーモフが、外套がいとうをきて外からはいつてくる。

トロフィーモフ　そろそろ出かける時間らしいな。馬車も来ている。だが癩しやくだな、僕のオーバーシューズはどこなんだ。消えてなくなっちゃったよ。(ドアの口へ)アーニャ、ぼくのオーバーシューズがないんです！ 見つからないんです！

ロパーヒン　わたしは、ハリコフへ行かなければならん。君たちと同じ汽車にするよ。ハリコフで、この一冬こすのさ。わたしはだいたい長いこと、おつきあいでぶらぶらしていて、仕事にやらんで閉口したよ。働かずにやられない性分で

ね、第一この両手の始末にこまるんだ。なんだか妙にこう
ブランブランして、まるで他人の手みたいだ。

トロフィーモフ おつつけ、みんな行っちゃいますよ。そこ
でまた有益な事業とやらに、着手なさるがいいさ。

ロパーヒン どう、一杯やらないかね。

トロフィーモフ いや、結構。

ロパーヒン じゃ、こんどはモスクワかね？

トロフィーモフ そう、皆さんを町まで送って行って、あし
たはモスクワだ。

ロパーヒン なるほど。……まあいいさ、大学の先生はみん
な、君の来るまで、講義をせずつて待ってるだろうからな！
トロフィーモフ よけいなお世話だ。

ロパーヒン 君は一体、大学に何年いるんだね？

トロフィーモフ 何かもつと、新しい手を考えたらどうだい？
その手は古いし、平凡だよ。(オーバーシューズをさがす)
ねえ君、僕たちはこれで、おそらく二度と会う時はあるまい。そこで一つ君に、お別れの忠告をさせてもらいたいんだがね——両手を振りまわすな、これさ！ そのぶんぶん振りまわす癖を、ひとつやめるんだね。こんどの別荘建築案にしてもそれだ。やがてその別荘の連中が、だんだん独立した農場主になって行くだろうなんてソロバンをはじくこと——そんな目算を立てることがそもそも、両手を振りまわすことなんだよ。……まあそれはそれとして、僕はやっぱり君が好きだ。君は役者か音楽家にでもありそうな、やさしい華奢きゃしゃな指をしている。そして君の心もちも、根はやさしくて華奢なんだよ。……

ロパーヒン (彼を抱いて) じゃこれでお別れだ、ペーチャ君。いろいろありがとう。もしいるんだったら、道中の費用に少し持って行かんかね。

トロフィーモフ なんだって僕に？ いらないよ。

ロパーヒン だって、ないじゃないか！

トロフィーモフ あるさ。お志はありがとう。ぼくは翻訳料をもらったんだ。ちゃんとそのポケットにある。(心配そうに) しかし、オーバーシューズがないんだ！

ワーリヤ (隣の部屋から) さっさと持ってって頂だい、この汚ならしいもの！ (ゴムのオーバーシューズを一足、舞台へほうり出す)

トロフィーモフ 何をそう怒るんです、ワーリヤ？ ふん……こりゃ僕のオーバーシューズじゃない！

ロパーヒン わたしはこの春、ケシを千町歩まいてね、今それで純益が四万あがった。そのケシが咲いた時にや、なんとも言えん眺め^{なが}だったよ！ まあそんなわけで、四万もうけたから、それでつまり貸したげようというのさ。できることだから言うのだ。何もそう乙に構えなくてもいいじゃないか？ わたしは百姓だ……ぎつくばらんさ。

トロフィーモフ 君の親父^{おやじ}が百姓で、僕の親父が葉屋だった、——といったところで、別にどうもこうもありやしない。(ロパーヒン紙入れを取りだす) やめてくれ、やめて。……たとえ二十万だしたって、受けとらないから。僕は自由な人間なんだ。君たちみんなが、金持も貧乏人も一様にありがたがつて、へいつくばる物なんか皆、ぼくにとつちやこれっぽっちの権威もない。空中にふわふわしている綿毛も

同然さ。僕は、君たちの世話にはならん、君たちがいなくたって立派にやって行ける。僕は強いんだ、誇りがあるんだ。人類は、この地上で達しうる限りの、最高の真実、最高の幸福をめざして進んでいる。僕はその最前列にいるんだ！

ロパーヒン　行き着けるかね？

トロフィーモフ　行き着けるとも。(間)　自分で行き着くか、さもなけりや、行き着く道をひとに教えてやる。

遠くで、桜の木に斧おのを打ちこむ音がきこえる。

ロパーヒン　じゃ君、ご機嫌きげんよう。もう出かける時刻だ。われわれお互いに、高慢そうな鼻つき合せちゃいるけれど、

時は遠慮なく、どんどん過ぎて行く。長いあいだつめて、疲れも知らず働いていると、わたしは頭のシコリがとれて、自分がなんのため生きているのか、それがわかるような気がする。それにしても君、このロシアにや、なんのためとも知れず生きている人間が、ずいぶんいるなあ。いや、まあどうでもいい、問題の流サーキュレーション通（訳注 聞きかじりの外来語をもちだしたおかしみ）は、そこにはないのさ。世間のうわさじゃ、ガーエフさんが職に就いたとかだ。銀行で、年に六千というんだが……。ただ、続きそうもないな、あの不精ぶしようもんじゃあ……

アーニヤ （ドアの口で）ママのお願いなんだけど、出かけるまでは、庭の木を伐きらないでくださいって。

トロフィーモフ ほんとにそうだ、君も気が利かないじゃな

いか。……（次の間を通つて退場）

ロパーヒン ただ今、ただ今。……なんという奴らだ、まつたく。（彼につづいて退場）

アーニヤ フィールスを病院へ送つたの？

ヤーシヤ 今朝そう言つとききましたから、送つたものと思われ
れます。

アーニヤ （広間を通つて行くエピホードフに）エピホード
フさん、フィールスを病院へ送つたかどうか、ちよつと調
べてちようだいな。

ヤーシヤ （ムツとして）今朝エゴールに言つとききましたつ
たら。何を十ぺんも訊くことがあるんです！

エピホードフ ご老体のフィールスは、結局ぼくの意見によ
るとですな、もう修繕が利きません。先祖代々のところへ

行くんですな。僕としては、ただただ羨望せんぼうに堪えんですよ。
(トランクを、帽子のボール箱の上へ置いて、つぶしてしま
う) ほらこれだ、つまり結局。どうせそうだろうと思つて
たよ。(退場)

ヤーシヤ (あざけるように) 二十二の不仕合せめ……

ワーニヤ (ドアの向うで) フィールスを病院へ送つたの？

アーニヤ 送りました。

ワーリヤ なんだつて、ドクトル宛あての手紙を持って行かなかつ

たんだらう？

アーニヤ それじゃ、追っかけて持たせてやらなけりや……

(退場)

ワーリヤ (隣の部屋から) ヤーシヤはどこ？ おつ母さん

がお別れに来てるつて、そう言つてちようだい。

ヤーシヤ (片手を振る) ちえつ、うんざりさせやがるなあ。

ドウニヤーシヤは、ずっと荷物のまわりであくせくして
いたが、今ヤーシヤが一人になったのを見すまし、そば
へ寄る。

ドウニヤーシヤ ちらりと一目ぐらい、見てくれたつていい
じゃないの、ヤーシヤ。あなたは行つてしまふのね……あ
たしを捨てるのね…… (泣きながら、男の首にすがりつく)

ヤーシヤ 何を泣くんだ? (シャンパンを飲む) 六日すりゃ、
おれはまたパリだ、あした特急に乗りこんで、目にもとま
らずフツ飛ばすんだ。なんだか本当にできないくらいだ。
ヴィーヴ・ラ・フランス (訳注 フランス万歳!) か! ……

ここはどうも性に合わないよ、とても暮して行けない……まあ仕方がないさ。無学な連中も、見あきるほど見たし——もうげんなりだよ。(シャンパンを飲む) なんの泣くことがあるんだね？ 身もちさえよくすりゃ、泣くことにもならんのだ。

ドウニヤーシヤ (懐中鏡を見ながら白粉おしろいをはたく) パリからお便りをくださいね。あたしあんたが、あんなに好きだったんだもの、ヤーシヤ、あんなに好きだったんだもの！ あたし華奢な女なのよ、ヤーシヤ！

ヤーシヤ おい、誰だれか来るぜ。(トランクのそばを、さも忙しそうに立ち回り、小声で鼻唄はなうたをうたう)

ラネーフスカヤ、ガーエフ、アーニヤ、シャルロット登

場。

ガーエフ そろそろ出かけなくちや。もう幾らもないぞ。(ヤー
 シヤを見て) 誰だい、ニシンの臭いにおをふんぷんさせる奴は？
 ラネーフスカヤ 十分ほどしたら、馬車に乗りこみましよう
 ね。……(部屋をぐるりと見まわす) さようなら、なつかし
 い家うち、昔なじみの家の精おじいさん。冬がすぎて春になると、お前は
 もういなくなる、こわされてしまう。この壁も、いろんな
 ことを見てきたのねえ！ (娘に熱くキスする) わたしの
 大事なアーニヤ、おまえはキラキラ光っているわ。二つの
 ダイヤモンドのように、お前の眼めはきらめいているわ。嬉
 しいの？ そんなに？

アーニヤ ええ。とても！ 新しい生活が始まるんですもの、

ママ!

ガーエフ (浮き浮きして) まったく、これでやっと万事めでたしき。桜の園の売れちまうまでは、われわれは始終わくわくして、えらい苦労だったものだが、こうして問題がきつぱり決着して、もうどうもならんとなつてからは、みんな氣持が落ちついて、かえつて陽氣になつたくらいだ。……わたしは銀行の勤め人で、今やいっぱしの財政家だ……黄玉は真ん中へ、さ。そしてリユーバ、おまえだつて、なんのかのと言うけれど、とにかく血色がよくなつたよ、それは確かだ。

ラネーフスカヤ ええ。神経はだいぶ収まりました、それは本当よ。(召使の手から帽子と外套を受けとる) よく寝られるようになったし。わたしの荷物を運び出しておくれ、ヤー

シヤ。もう時間だわ。(アーニヤに)それじゃアーニヤ、近いうちに会いましょうね。……わたしはパリへ行つて、ヤロスラーヴリのおばあさまが領地を買いもどせと送つてくだすつた、あのお金で暮すつもり——おばあさまも、どうぞお達者でね! ——でも、あのお金だつて、長くはもつまいよ。

アーニヤ ママ、じきに帰つてらつしやるんでしよう、じきに……ね、そうでしょう? わたしは、勉強して、女学校の検定試験をとおつて、それから働いて、ママの暮しを助けるわ。そうしたらママ、一緒に色んな本を読みましようね。……そうじゃなくて? (母の両手にキスする)ふたりで、秋の夜長に読みましようね。どつきり読みましようね。するとわたしたちの前に、新しい、すばらしい世界がひら

けるんだわ。……（夢想する）ママ、帰ってらしてね……
ラネーフスカヤ 帰って来ますよ、可愛^{かわい}いおまえのところへ。
（娘を抱きしめる）

ロパーヒン登場。シャルロットはそつと小曲を歌つてい
る。

ガーエフ シャルロットはいいなあ、歌なんか歌ってる！

シャルロット （くるまれた赤んぼのような格好をした包み

をかかえて）わたしの赤ちゃん、ねんねんよう……（オギヤ

ア、オギヤア！ ……という泣き声がする）おお、よしよ

し、いい子、いい子。（オギヤア！ ……オギヤア！ ……）

可愛^{かわい}い
可哀^{かわい}そうに、誰が誰が！ （包みを元の場所へ投げだす）だ

からあなた、お願い、勤め口をさがしてちょうだいよ。これじゃ、どうしようもないわ。

ロパーヒン さがしたげますよ、シャルロットさん、大丈夫です。

ガーエフ みんな、われわれを捨ててくんだな、ワーリヤも行つちまうし……どうもとたんに、用なしの人間になつちまつた。

シャルロット 町にはわたし、住むうちもないし。出てかなきやならないわ。……（小曲を口ずさむ）どうせ同じことさ……

ピーシチク登場。

ロパーヒン よう、天然記念物！ ……

ピーシチク (息を切らして) やれやれ、まあ一息つかして
ください……へとへとだ。……皆さん、ご機嫌……。水を
いっばい……

ガーエフ どうせまた金のことだろう？ 桑原桑原、まつぴ

らご免…… (退場)

ピーシチク 久しくごぶさたしましたなあ……奥さん…… (ロ
パーヒンに) 君もいたのか……こいつは嬉しい……よう、
天下一の知恵ぶくろ……取ってくれ……まあこれを。……
(ロパーヒンに金を渡す) 四百ルーブリだ……あとまだ八百
四十、借りになつてるが……

ロパーヒン (けげんそうに肩をすくめる) こりや夢のよう
だ。……一体どこで手に入れたんだね？

ピーシチク まあ待つてくれ……暑い……。前代未聞の大事ぜんだいいもん

件なんだ。わしのところへイギリス人どもがやつて来てね、地面から何か古い粘土を見つけたのさ。……（ラネー

フスカヤ夫人に）あなたにも四百……な、天人のような奥さん。……（金をわたす）あとはまた後ほど。（水を飲む）

今しがた、どこかの若い男が汽車の中で話しておったが、なんとかいう……偉大な哲学者は、屋根から飛びおりろ、と勧めておるそうだ……「飛びおりろ！」——それだけのことだ、とな。（仰天したように）こりやどうだ！ 水を一杯！ ……

ロパーヒン イギリス人つて、いったい何者かね？

ピーシチク とにかくその連中に、粘土の出る地面を向う二十四年間、貸したんだ。……ところで今は、申しわけない

が暇がない……話の先を急ぐんでね。……これから、ズノ
イコフのところへ行く……それからカルダーモノフのこ
ろへもね。……みんな借りがあるのさ。……（飲む）では
これで失礼。……木曜にまた伺います……

ラネーフスカヤ わたしたち、すぐこれから町へ引越して、
あしたわたしは外国へ発ちますの……

ピーシチク なんですか？（そわそわして）なぜまた町へな
んぞ？ いや、なるほどこうして見ると、家具だの……トラ
ンクだの……。なあに、平気ですよ。……（涙ごえで）大丈
夫ですよ。……いやどうも、えらい知患者ですなあ——あの
イギリス人というやつは……。なあに大丈夫……どうぞお
仕合せで……。なんでもありませんよ。……神さまが助け
てくださいますとも……大丈夫ですよ。……この世のこと

は何ごととも終りありでしてな。……（ラネーフスカヤ夫人の手にキスする）もし風の便りにでも、このわたしに終りが来たという噂うわさがお耳にはいつたら、どうか、このそれ……馬のことを思いだして、「そうそう、昔あのなんとかいう奴……シメオーノフIIピーシチクという男もいたつけな……安らかに昇天せんことを」とでも言つてください。……いや、すばらしい上天気ですなあ。……まったく……（へどもどして退場。が、すぐ引返してきて、ドアのところ）うちのダーシエンカが宜よろしくと申しました！（退場）

ラネーフスカヤ　さ、これでもう出かけられる。じつはわたし、発つて行くのに、気がかりなことが二つあるの。一つは——病気のフィールス。（時計をのぞいてみて）まだ五分ほどいいわ……

アーニヤ ママ、フィールスはもう病院へやったわ。ヤーシヤがけさやったの。

ラネーフスカヤ もう一つの心配は——ワーリヤのこと。あの子は、早起きをして働きつけてるものだから、今じゃ仕事がなく、魚が水をはなれたも同然よ。瘦やせて、顔色が悪くなつて、可哀そうに泣いてばかりいるわ。……(間)あなたはそのを、よくご存じのはずね、ロパーヒンさん。わたしはこう思っていましたの……あの子をあなたのところへとね。それにあなたのほうでも、お見受けするところ、結婚なさりそうな模様でしたものね。(アーニヤに耳うちする。アーニヤはシャルロットにうなずいて見せ、ふたり退場) あの子はあなたを愛していますし、あなたもあれがまんざらでもなさそうなのに、わからないわ、どうもわから

ない、なぜあなたがた二人は、おたがい避け合うようなふうをなさるのか。わからないわ！

ロパーヒン わたし自身も、じつはわからないんです。どうも何かこう妙な具合でしてね。……まだ時間があるようなら、わたしは今すぐでも結構です。……一気に片をつけて——あがりになります。あなたがいらっしやらなくなると、どうもわたしは、申込みをしそうもありませんよ。

ラネーフスカヤ 願ったりですわ。一分もありや、じゅうぶんですものね。すぐあの子を呼びましょう。

ロパーヒン ちょうどシャンパンもあります。(小型グラスをすかして見て) おや、空^{から}だ、誰かもう飲んじまった。(ヤーシャ咳^{せき}払いをする) がぶ飲みとはこのことだ……

ラネーフスカヤ (いそいそと) 結構だわね。わたしたちは

向うへ……ヤーシヤ、おいで！　いま呼びますからね……

(ドアの口へ) ワーリヤ、そこはほつといて、こつちへおいで。さ、早く！　(ヤーシヤとともに退場)

ロパーヒン　(時計をのぞいて) そう…… (間)

ドアの向うで忍び笑い、ひそひそ声、やがてワーリヤ登場。

ワーリヤ　(長いこと、あれこれと荷物を調べる) おかしいわ、どうしても見つからない……

ロパーヒン　何がないんですか？

ワーリヤ　自分でしまいこんだくせに、覚えがないんですの。

(間)

ロパーヒン あなたはこれからどうされます、ワルワーラ（訳注　ワーリヤの正式の名）さん？

ワーリヤ わたし？　ラグーリンのところへ行きます。……あすこの家政を見ることになりましたの……女の家令とでもいうのかしら。

ロパーヒン ではヤーシネヴォ村ですね？　七十キロもありますよ。（間）いよいよこの家の生活もおしまいになりましたね。……

ワーリヤ（荷物を見まわしながら）どこへ行つたんだろう、あれは……もしかすると、長持へ入れたのかもしれない。……ええ、この家の生活もおしまいですわ……もう二度と返つては来ませんわ……

ロパーヒン わたしはこれからすぐ、ハリコフへ発ちます……

この汽車でね。どうも仕事が多くてね。この屋敷うちには、エピソードを置いておきます。……あの男を雇ったのでね。

ワリーヤ あら、そう！

ロパーヒン 去年の今ごろは、もう雪がふっていました。おぼえておいですか。ところが今は、おだやかで、日が照っています。ただ、寒いには寒いですな。……零下三度ぐらいでしょうな。

ワリーヤ わたし見ませんでした。(間) それに、うちの寒暖計はこわれていますから……。(間)

戸外の声 (ドアの口で) ロパーヒンさん！……

ロパーヒン (とうからこの呼び声を待っていたかのように) ああ、今すぐ！ (急いで退場)

ワリーヤは床に坐^{すわ}つて、衣服の包みに頭をのせ、静かに
むせびなく。ドアがあいて、そつとラネーフスカヤ夫人
がはいってくる。

ラネーフスカヤ どうだつたの？ (間) もう行かなくちや。

ワリーヤ (もう泣きやんでいて、眼をふく) ええ、時間で
すわ、ママ。わたし今日のうちに、ラグーリンのところへ
着けると思うわ。汽車に乗りおくれさえしなければね……
ラネーフスカヤ (ドアの口へ) アーニヤ、支度はいいの？

アーニヤ、少しおくれてガーエフ、シャルロット登場。
ガーエフは頭^{ずきん}巾のついた暖^{がいと}かい外套を着ている。召使た

ちや馭者^{ぎよしゃ}たちが集まる。エピホードフは荷物の世話をや
く。

ラネーフスカヤ さあ、もうこれで発てるわ。

アーニヤ (嬉し^{うれ}そうに) 出発だわ!

ガーエフ 親愛なる諸君、敬愛おくあたわざる友人諸君! い
ま永遠にこの家を去るに臨んで、果して口をつぐんでおら
れましょうか。告別のため、今わたくしの全幅を領してい
る感慨を、ここに吐露せずにおられましょうか……

アーニヤ (哀願するように) 伯父さま!

ワーリヤ 伯父さん、およしなさいったら!

ガーエフ (しよげて) 黄玉を空^{から}クツションで真ん中へ……。

黙るよ。……

トロフィーモフ、つづいてロパーヒン登場。

トロフィーモフ　まだですか、皆さん、もう出発の時間です

よ！

ロパーヒン　エピソードフ、おれの外套を！

ラネーフスカヤ　わたし、もうちよつとだけ坐ってみよう（訳

注　旅立ちの前に、しばらく腰をおろす習慣がロシア人にある）。わたしまるで、今まで一度も、この家の壁がどんなだか、天井がどんなだか、見たことがないみたい。今になつてやつと、見ても見飽きない気持で、たまらなく懐かしい気持で、眺^{なが}めるんだわ……

ガーエフ　いまだに覚えてるが、わたしが六つするとき、聖^{トロイツァ}霊降臨

の日曜日に、わたしがこの窓に腰かけて見ていると、お父さんが教会へ出かけて行つたつけ……

ラネーフスカヤ 荷物はみんな出まして？

ロパーヒン どうやら、みんなです。（外套を着ながら、エピホードフに）いいかい、エピホードフ、あとは宜しく頼むよ。

エピホードフ （しやがれ声で）ご心配なく、行つてらっしゃいます。

ロパーヒン 一体どうしたんだ、その声は？

エピホードフ いま水を飲んだ拍子に、何かのみこみましたんで。

ヤーシヤ （けいべつ軽蔑して）間抜けめ！

ラネーフスカヤ わたしたちが行つてしまうと、ここには人つ

子ひとり残らないのねえ……

ロパーヒン 春が来るまでだね。

ワリーヤ (包みから洋傘ようがさを抜きだす。まるで振上げるような格好になる。ロパーヒン、ぎよつとした身振り) あら、何ですの、どうなすつたの……。わたし、そんなつもりじゃなかつたのに。

トロフィーモフ 皆さん、さあ乗りこみましょう。……もう時間です！ 間もなく汽車がはいりますよ！

ワリーヤ ペーチヤ、さ、あつたわ、あんたのオーバーシューズ。手提カバンのかげに。(涙ぐんで) でもあんたの、なんて汚ならしい、おんぼろなの……

トロフィーモフ (オーバーシューズをはきながら) さあ行きましよう、皆さん！ ……

ガーエフ (泣きだしそうになり、ひどくうろたえる) 汽車
が……その、停車場が……。ひねって真ん中へ、白玉は空
クツションで隅へ……

ラネーフスカヤ 行きましょう!

ロパーヒン みんなお揃いですね? 向うには誰もいません

ね? (左側のドアに錠をおろす) ここには家財が置いてあ
るので、錠をおろしとかなければね。さあ行きましょう!

……

アーニヤ さようなら、わたしの家! さようなら、古い生

活!

トロフィーモフ ようこそ、新しい生活! …… (アーニヤ

と一緒に退場)

ワーリヤは部屋を一わたり見まわし、ゆつくりと退場。
ヤーシヤ、および犬を連れたシャルロットも退場。

ロパーヒン では、春まで。さ、行こうじゃありませんか、皆
さん。……ご機嫌きげんよう！ ……（退場）

ラネーフスカヤとガーエフ、ふたりだけ残る。ふたりは
それを待ち兼ねたように、たがいにぱつと頸くびに抱きつき、
人に聞かれぬように声を忍んで、静かにむせび泣く。

ガーエフ （身も世もあらず）ああ妹、可愛い妹……

ラネーフスカヤ ああ、わたしのいとしい、なつかしい、美
しい庭！ ……わたしの生活、わたしの青春、わたしの幸

福、さようなら！ ……さようなら！ ……

アーニヤの声 （浮き浮きと、招き寄せるような声で）ママ！

……

トロフィーモフの声 （浮き浮きと、感激をこめて）おーい！

……

ラネーフスカヤ お名残りにもう一度、壁を見て、窓をながめて……亡なくなったお母さまは、この部屋を歩くのがお好きだったわ。……

ガーエフ ああ妹、可愛い妹！ ……

アーニヤの声 ママ！ ……

トロフィーモフの声 おーい！ ……

ラネーフスカヤ いま行きますよ！ （ふたり退場）

舞台からになる。方々のドアに錠をおろす音がして、やがて馬車が数台出て行く音がきこえる。ひっそりとする。その静けさのなかに、木を伐るおの斧のきにぶい音が、さびしく物悲しくひびきわたる。

足音がきこえる。右手のドアから、フィールスが現われる。ふだんのとおり、背広に白チョッキをつけ、足には室内ばきを穿はいている。病気なのである。

フィールス (ドアに近づいて、把手とってにさわってみる) 錠が

おりている。行ってしまったんだな。…… (ソファに腰を

おろす) わしのことを忘れていったな。……なあに、いい

さ……まあ、こうして坐つていよう。……だが旦那だんなさまは、

どうやら毛皮シユールバ外套も召さずに、ただの外套でいらしたらし

い。……（心配ためいきそうな溜息）わしの目が、つい届かなかつたもんでな。……ほんとに若わえお人というものは！（何やらぶつぶつ言うが、聞きとれない）一生が過ぎてしまった、まるで生きた覚えがないくらいだ。……（横になる）どれ、ひとつ横になるか。……ええ、なんてぎまだ、精も根もありやしねえ、もぬけのからだ。……ええ、この……出来そこねえめが！……（横になつたまま、身じろぎもしない）

はるか遠くで、まるで天から響いたような物音がする。それは弦つるの切れた音で、しだいに悲しげに消えてゆく。ふたたび静寂。そして遠く庭のほうで、木に斧を打ちこむ音だけがきこえる。

後註

- 一 「そ」に「*」の傍記
二 「生」に「*」の傍記

底本：「桜の園・三人姉妹」新潮文庫、新潮社

1967（昭和 42）年 8 月 30 日発行

1990（平成 2）年 8 月 20 日 47 刷改版

2000（平成 12）年 3 月 15 日 82 刷発行

※底本の二重山括弧は、ルビ記号と重複するため、学術記号の「≪」（非常に小さい、2-67）と「≫」（非常に大きい、2-68）に代えて入力しました。

※二重ハイフンは、「＝」（等号、1-65）で入力しました。

入力：大野晋

校正：鈴木厚司

2010 年 3 月 19 日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。